
恋のキューピッド君

わたるくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のキューピッド君

【Zコード】

Z5716Z

【作者名】

わたるくん

【あらすじ】

高校に入学してから二ヶ月が経つた。クラスでの俺の立場と言つたら、教室でゲームをしたり、ラノベを読んだりしているキモいヲタク君。

そんな俺こと、上木幸司のもとに舞い込んできたのは、ヲタクという不本意なレッテルを張りやがった女子の恋愛サポート！？
なんで、そんな嫌いなヤツを助けなくちゃならないんだ！ 俺は断固拒否するぞ！

絶対、絶対だからな！！

……とか言いつつ、結局巻き込まれる男のお話。

高校生活つてシラいよね？（前書き）

他に書いた小説とは違い、初めての一人称に挑戦してみました。
やつぱり恋愛が絡んでくると一人称の方が主人公の思っていること
が表現がしやすかったり（笑）

高校生活ってシラいよね？

「なあ、上木のヤツまた教室でゲームやつてるぜ？」友達が一人もいないからつて寂しいヤツだよな」

「仕方ないんじゃないか？あまり人と話さないタイプみたいだし、見た目もダサイじやん。女子にもキモがられてるみたいだし、あんなヤツと仲良くしてたら、俺たちまで同類だつて思われるつて」

ハアア……また俺のことを貶す声が聞こえてくる。入学してからもう何ヶ月か経つてるので、アイツ等もよく飽きないよな。そんな教室の扉の前で話なんてしないで、言いたいことがあるなら面と向かつて言えってんだ。

「でもよ、上木も災難だよな。一人寂しくゲームなんてやつてるから、クラスの女子全員からヲタクつて呼ばれて嫌われてるんだぜ？」
俺なら耐えられないね」

うるせえ、口だけの同情なんていらねえんだよ。女子たちにイビられてないお前等なんかに、俺の気持ちが分かつてたまるか。

もう、なんていうかね？ 教室の隅で女子グループが集まつてヒソヒソ話しているだけで、俺の悪口言われてるような気分になるんだよ。その時はわざと寝たふりなんかしてるが、耳だけは俺の意思に反して、無意識に女子たちの会話を盗み聞きしようとするんだ。

……結局、聞こえないんだけどな。

なつ？ お前にこの切なくて虚しい気持ちを理解できる訳ねえだろ？

「それに……つ！？」

「おい、急にどうしたんだよ……つ！？」

おつと、一人が黙り込んだぞ。これはアレだな。アイツの『登場つてわけか？

「ちょっと、アンタたち。教室のドアの前に立たないでくれる？ ちょー邪魔なんすけど？？」

ソプラノボイスの奏でる澄んだ声が聞こえると、一人を先頭にわらわらと数人の女子たちが教室に入ってくる。

長いウェーブがかつた髪は茶色に染められており、校則つて何だけ？ と思わせるほどの足を露出させた短いスカート。おそらく特殊な趣味でもないかぎり、ほとんどの男が可愛いと言うだろう。正直、見た目だけなら雑誌でモデルやってますと言われても信じてしまうくらいだ。

そう、先頭を悠然と陣取る彼女こそが俺の天敵、香澄恋歌かすみれんがだ。

クラスでは、その持ち前の容姿と明るさで人気があるようだが、俺からみたら嫌な女もいいところ。

すべて彼女が悪いとは言わないが、香澄の余計な一言がきっかけで、俺がクラスからハブられる原因になったのは間違いないと思っている。

それは、入学してから一週間が経った昼休みの出来事。

周りは楽しく昼食を取つたりおしゃべりをしている中、俺は未だにクラスで馴染めておらず、暇つぶしでもと教室の片隅で一人ゲームをやつていた時に事は起こつた。

最初、特に何の問題もなく坦々とゲームをしていると、途中から誰かの視線を感じ、一時プレイを中断して辺りを見回した。

そして、近くに陣取つていた女子グループが「チラを指し何か話していることに気づく。

俺はすぐさま目線を下ろし、再びゲームを開いたような態度を取り気づいていないフリをするが、さすがに気になるので聞き耳を

立ててみる。

「ねえねえ、上木が一人でゲームやつてるよ。アイツって今流行りのヲタクってやつじやない？」

「ん？　ああ、本當だ。なんか見た目もダサいし、学校にまでゲーム持つてきてるくらいなんだから相当かもよ？」

「うつわ……それってちょっとキモくない？」

「アイツって確かに上木って名前だったよね。あんまり話してるところ見たことないし、暗そうなヤツだつて思つてたんだあ～」

えつ……。俺つて今そんな風に見えてるの？

さつ、さすがにそれは言いすぎじゃないかな？　別にアニメとかゲームが嫌いって訳じやないといつか……むしろ好きな方だから間違つてはないと、ちょっと傷つくな……。

その時は少し嫌な思いをしたな、くらいで済んだはずだった。
しかし、

数日が経つた時に俺の立場は激変し、クラスのみんなからハーブられ始めたのだ。

その理由は後日、明らかとなつた。

どうやらあの昼休みの後、香澄の周りにいた取り巻きたちが調子に乗つて「上木つてヲタクでキモい！」なんて面白がりながら同調し、クラス全体にまでその噂を流したらしい。

香澄まで俺の噂を流したのかは分からぬが、彼女の取り巻きが原因なのは間違ひなかつた。

そこからが俺の高校生活の転落が始まつたと断言してもいい。

正直、何故それくらいでキモイという烙印まで押されなければならぬのか……俺にはまったく理解ができなかつた。最近は、ラノベとかゲームが好きというくらいでヲタク扱いされるんだから、本当に嫌な世の中になつたもんだぜと嘆息してしまうくらい。

昔のことと思い出していたら、さっきの男一人組が黙つて道を譲つたな。アイツらもクラスじゃあそれほど目立つ立場じゃないからな。香澄恋歌から見ればあまり好みないタイプなんだわつむ。

そんなお互いを嫌っていた関係だつたのに、なんだつてあんなことに……。

俺は入学してから一ヶ月の時点で、すでに来年のクラス替えを夢見ていたのだ。

それが、あんな横暴ギャルに振り回される高校生活を送るハメになるなんて……誰が想像できただろうか。

すべての始まりは、学校で一番有名であつて、あの先輩から始まつたことだった。

高校生活について語り合おう？（後書き）

まだまだ序章もいいところなので、最後までお付き合いしていただけたら嬉しいです。

いつもと変わらない朝？

ピッピッピッピッピッピ……。

聞きなれた電子音が鳴り響き、俺はいつものように目を開きました。重い目蓋を開くと、窓から覗く陽光が目に入ってくる。春から夏に移り変わるうららかな気配により、ベッドから出たくないという衝動に駆られてしまう。だが、カーテンの隙間から漏れ出る眩しさに、否応なしに寝ぼけた意識が覚醒されていく。

「ああ……鬱だ」

すでに、何度このセリフを吐いたかなど記憶はない。

ただ、あの出来事があった日から今日まで、一日一回は言つたとしても、最低六十回は言つた計算になる。

これはもうアレじやね？ 俺の中でベスト・オブ・流行語大賞になっちゃまう勢いだよ。

……虚しい、虚しいぜ俺。なんで寝起きから一人でアホなこと考えなくちゃならねえんだ。

言葉通り、憂鬱な気持ちを抱えたまま起き上がり、支度を始めた。

今日は六月十三日の月曜日だ。

今日から新たな一週間が始まると思うと、気が重くなる。

なぜなら、俺こと、上木幸司かみきこうじはクラスでハブられているからだ。暴力やイジメとまでは言わないが、女子からはキモイヲタクという不本意な烙印を押され、男子からはそんな女子に嫌われたくないと距離を置かれてしまっている。

その事実を最初に知ったときはショックだった。

今まで友達が多かつたとは言わないまでも、小さいころからの付

き合いがあるヤツや、同じゲーム好きのヤツなんかと、中学生の時までは楽しく過ごすことができていたのだ。

そんな俺が、家庭の事情によって実家から遠く離れた高校に入学したため、周りに昔から仲の良かつた友達が一人もいなくなってしまった。元々、あまり人と「ミニミニケーション」をとる事が得意でない俺としては、初めて出会うヤツに自分から声を掛けることすら躊躇^{めら}つてしまつ。

しかし、そんな俺の事情など知らないかのように、周りの連中は日が経つごとにどんどんグループ化していく。そんな、仲のいいグループという強固な防御フィールドに守られたメンバーの中に入つていくなんて、さらに難易度が跳ね上がるだろう。

仕方がないから、一人でも発動できるATフィールドを開拓するしかなかつた訳だが……アレ？ いま、俺上手いこと言つたよね？ 高校に入学して一週間、俺は『ぼっち』な状況に追い込まれてい

た。

そんな俺の学校での暇つぶしと言えば、昔から大好きだったゲームである。寂しさを紛らわせるために、仕方なく教室でゲームをプレイしていた時だ。

あの女にしてやられてしまつたのは。

その女の名前は 香澄恋歌^{かすみれんが}。

入学した当初から、アイドル顔負けな可愛さと天真爛漫な性格で、すぐにクラスで頭角を^{あらわ}顯^{あと}にしていた。

今では女子たちの中心に躍り出て、イケてる男子たちに持て囃^{はや}されている。本人は気づいているのか分からぬが、彼女の影響力はクラス全体に浸透し、ただの噂であつても瞬く間に広がってしまうと言つても過言ではないだろう。

実際、俺がその犠牲者第一号なんだからな。

あの時の迂闊^{うかつ}な自分を殴つてやりたいぜ。一度イメージが定着し

たら、そこから抜け出すのは簡単じゃない。

香澄が噂のことをどう思つていいかは知らないが、俺からしてみれば本当に溜まつたもんじゃねえっーの。

そんな状況でも入学から二ヶ月が経った。

慣れとまでは言わないまでも、それが当たり前の日常だと思えるくらいには。

それでも一週間が始まる月曜日の朝は嫌いだ。だいたい、誰が好き好んで友達が一人もいない学校に行かなくちゃならないんだ。考えただけでも気が滅入るわ。

俺はのろのろと準備を終えて、玄関にたどり着いた。

「ああ……鬱だ」

俺は、再び何度も呟いたが分からぬセリフを吐きながら、玄関の扉を開けて一步を踏み出す。

今日もいつもと変わらない生活が始まると思い込んだまま。

厄介な先輩とHンカウント？（前書き）

ようやく本筋に入つた。

厄介な先輩とHンカウント？

希望である夏休みまで残り一か月に迫った、六月の朝。玄関から一步外に出るだけで、今の季節にはまだ早い蒸し暑い熱気に包まれた。

無意識に見上げた空は、雲ひとつない快晴であり、燐々（さんさん）と輝く太陽の光が辺り一面に降り注いでいる。

俺は未だに真新しい制服を着込み、大きく深呼吸をした。クラスの嫌な連中から解放され、少しだけ清々しい気分になつてくる。さすがに今から学校に向かうまでの道中は、周りを意識する必要もなければ、無理に気を使う必要すらもないだろ？

俺の通う鷺峰高校は、住んでいるアパートから徒歩三十分の場所にある。本当ならもっと近い場所に住みたかったのだが、両親が友人らの遊び場になるといけないからと、少々離れた賃貸アパートにされてしまった。

今考えると、両親の心配は杞憂きゆうだつたかもしれない。

なぜなら、友達のいない俺の家に誰かが遊びにくるなんて、そんなミラクルが起きる訳ないからな。

……あつ、自分で言つて悲しくなつてきた。

入学したばかりの頃は、これから始まる高校生活に淡い期待を抱いていたこともあった。可愛い彼女が出来たらと、大きな夢を抱きつつも、せめて女の子の友達ぐらいならと現実的な夢も持つていた。そんな現実的な夢なのに、どうしてこいつなつてしまつたのか。

……いや、理由は分かるんだけどさ。なんかこう、認めたくないことだつてあるよな？ 理解はしても納得はできないみたいなさ。

通学路を歩いていると、目の前の角から俺の通う高校と同じ制服を着た女の子が顔を出した。長い黒髪をまっすぐに伸ばし、腰のあたりにある毛先が、歩く動きに合わせてコラコラと踊るかのように

舞っている。

俺は彼女のことを知っている。

遠目でも分かるような細く纖細なスタイル。スカートから伸びるスラッとした長い足。すべての男が思わず振り向いてしまうような美しい尊顔。それはまるで、この世の美といつものすべてを引き集めたかのような女性。

弥富朱音さんだ。
やとみあかね

彼女のことを、鷺峰高校で知らぬ者はいないだろう。友達がいない俺でも、周りの会話を盗み聞きしているだけで何度もその名を聞いたか分からない。

今までこんなに間近で見たことはなかつたが、さすがは噂の弥富朱音さんだと納得してしまう。こんなに美しい人だったら、男たちはさぞ夢中になるだろう。

彼女は出会った角を曲がり、俺の前を悠然と歩いている。そんな華麗に歩く後姿からなかなか目を離すことができない。

特にスカートの中から伸びるキレイで染み一つない真っ白な太ももから。

自分も彼女の歩幅に合わせながら、マジマジとした視線で見つめていると、突然彼女が歩みを止めて、後ろを振り返った。

俺もつい足を止めてしまい、その場で立ち竦んでしまう。

「ねえ、キミ」

清涼で涼しげな印象を受ける声がかかる。

人によつては少し冷たいと感じる人もいるかもしれないが、俺にしてみれば“弥富朱音”という手の届かない至高の華というイメージにピッタリの声だ。

「ねえ、キミつてば」

ん？ イメージ通りの美声に少し呆けてしまつたが、誰かに声を掛けているのか。こんな美人さんに話しかけられて無視するなんて、

けしからんヤツだな。

「あなた、聞こえてないの？」

まだ無視してんのか……そこまでいつたらもはや焦りしプレイだろ。俺なら舞い上がるくらいテンションが上がるのに。

「自分が話しかけられてるって気づいてないの？ そこにボーッと突っ立つているキミよ、キミ」

なんか、弥富さんがこっちを指せしてくれた。俺の後ろにいるのか、仕方がないから退いてやるか。

俺は立っていた場所から移動して、道の端に寄つた。

ツー。

アレ？ 弥富さんの指がこっちを追いかけてくる。なんでだ？

「キミ……それ、わざとやつてる訳じゃないよね？」

何か俺を見ながら話しかけてくるぞ。

……つて、まさか俺！？ とつ、とりあえず間違いかもしれないから聞いてみるか。

「あの、まさかキミつて俺のことですか？」

「ううう。話しかけても無視されっぱなしだからどうしたもんかと思つちやつたわ」

どうやら本当に、道路の壁にナメクジのように寄り添つている俺に話しかけていたらしい。でも、何でだ？ 別に彼女とは知り合いじゃないし、もちろん友達でもないんだが。

……もしかして、今までずっと見つめていたことがバレてて注意するために話しかけたとか！？ しまった！！ なんという失態を犯してしまったんだ。このままじゃあ、下手するとクラスだけじゃなくて、学校全体から白い目で見られることになるぞ！ ここは謝つて許してもらつしかない！！

「す、すいませんでした。もつあなた様には近づかないし、視界にもいれないように気をつけるので、ここは許してください……！」

思いつきり頭を下げる。最悪、土下座してもいいとすら思つ。

「何を言つてゐるのか全然分からぬけど、たぶんキミが思つてゐるよなことじやないから気にしなくていいわよ?」

えつ、さうなの? 良かつたあーこれから高校生活がさらなる暗黒時代に突入するかと思つたぜ。

でも、そうじやなかつたら何で俺なんかに話しかけたんだ? 自分の言つのもなんだが、クラスの偽アイドルである香澄恋歌かすみれんがとは違つて、全校男子生徒の中で正真正銘のアイドルと化している弥富朱音さんやとみ しゆおんに話しかけられるような男じやないと思うんだが俺は。

「うへん、突然聞くんだけどさあ、キミつて今、部活とかに入つてる?」

本当に突然だ。なんの脈絡すらもない。理由は分からないが、別に答えられない質問でもない。

「いえ、入つてませんが、それがどうかしましたか?」

それを聞いた途端、田の前にいる彼女は一瞬だけ笑みを作つたかと思うと、

「それじゃあ、今日の放課後に部室棟にある110号室に来てくれる?」

「えつ……なぜですか?」

「質問に質問で返さないでね。言つておくけど、来なかつたらさつきまで私のことエッチな目で見つたこと、学校中に言つふらすわよ?」

「ブツ!..」

言われたことが信じられず、吹き出してしまつた。

「てか、なんで俺が謝つたのか理解してゐるじやありませんか、弥富朱音さんよ。そんなこと言われたら後が怖くて行くしかないじやないですか……。

「わつ、わかりました。謹んで行かせていただきます……ですから学校に言いふらすことだけは、何卒ご勘弁を」

「うんつ、よろしく。最後のはキミが本当に來たら考えるわ。それ

じゃあ放課後に部室で待ってるわね」「

それだけを言い残し、彼女は走つて行つた。

未だに壁際で突つ立つたまま動けない俺を放置して。

……どうして、こうなった。こうなつてしまつては、彼女の言つとおり放課後会いに行くしかないだろう。

ようやくフリーズから立ち直つた俺はいつものセリフを呴いた。

「ああ……鬱だ」

ポツリと呴いた俺の声は、誰にも聞こえないまま、その場で巻き起こつた風に吹かれてかき消されてしまった。

結局何なんですか？（前書き）

やつぱり 一人称って難しいです。

結局何なんですか？

ついに、ついに、この時が訪れてしまった。

授業もすべてが終わり、これから弥富朱音さんやとみあかねの待つ部室に行くことになると思うと、鉄球が付いたように足が重くなる。

今日も以前と変わらない“ぼっち生活”を送っていたのだが、時折聞こえてくるヒソヒソ声も、悪口のような言葉も、まったくと言つていいほど耳に入らない。この後に待ち受けのものがなければ、ある意味、普段よりも落ち着いた平穏だったのかもしれない。

そう感じてしまつほど、俺の心は不安でいっぱいだつた。

本当に彼女は何の目的があつて、自分なんて男を誘つたのか。おそらく彼女が誘いを掛ければ、大半の生徒がホイホイと応じるだろう。

これほどの数の生徒がいる中、なぜ俺に声をかけて部室に招待したのか、一日中考えても答えはでなかつた。

このような場合、普通なら怪しんで行かないところなのだが……。

今回、俺は逃げ道を潰されているのだ。

若干、脅迫めいたやり方で。

俺は、仕方なく教科書などの荷物をカバンに纏めると、いつもより暗いオーラを撒き散らしながら教室を後にする。そして、そのままの足取りで指定された部室棟1110号室さかわやへと向かつていった。

後ろから、クラスメイトが再び何かを囁きあつていうような声もガン無視して……。

扉の上に貼り付けられたプレートには、書式も分からぬようないい字体で、『CLUB ROOM 110』と書かれている。
ドアノブに手を掛けて、大きく息を吸う。
ここに入つたら、引き返すことはできないだろう。万全の覚悟を

持つていないと、どうなるか分かつものではない。

限界まで息を吸つたところで、今まで溜めた酸素を一気に

吐き出す。

よしつ！ 入るか！！

と、心中で覚悟を決め、ついに扉を開けはなつた。

「ここにちは、ようやく来たわね」

花の咲くような笑顔で挨拶された。

やばい……彼女の顔を見ただけで、覚悟が折れてしまいそうなんだが……。

改めて見ると、やはり綺麗な人だと思つ。一人きりしかいない部屋の中にいるだけで、意識したくもないのに顔が少し赤くなつてしまふのが分かる。手で顔を押さえる訳にもいかないので、顔の火照りに気づかないでいてくれることを祈るばかりだ。

「さあ、まずはそこの椅子に座つてちょうだい」

細く纖細な指が部屋の中心に置かれている丸テーブルへと向けられている。結局何をしたいのかは分からぬが、とりあえず言われた通りにテーブルとセットになつてている椅子に腰掛ける。

すると、弥富さんも俺と対面になるように椅子に座つた。

「それじゃあまず、お互いの自己紹介といきましょうか。たぶん知つていると思うけど、私の名前は弥富朱音よ」

ほぼ初対面の俺に『私のこと知つてると思うけど』ってどれだけ自分に自信持つてんだ？ まあ、結局知つているから、自信過剰でも何でもないんだが。

「今度はキミの番よ？ ネクタイの色が緑だから、今年入学してきました新人生よね？」

弥富さんはリボンの色が赤いから一年生ですよね？

……なんて、気軽に聞き返せる訳ねえだろうが。

いやとら学校一有名な人を目の前にして、いっぱいいっぱいなん

だよ。なんて言えばいいのか分からんが、お互いの見た目と雰囲気

ても回りで回りを追いつめます。

「はい。一年生の上木幸同です」

仕方なく無難に返答してみる。

「うーん、もう以前も聞いたから幸田くんでいいよね？」

うおおオオオオオオオオオオオオ！！

学校一の美人さんにつ……名前、名前で呼ばれた！ なつ、なんてこつた。友達の一人もできないヲタクなキモ男^おなのに、そんな嬉しいことがあつていいのか！？

あつ、自分でキモ野つて書つたやつ。

自己嫌悪に陥り、
まい上がりつていち

「幸司くん、ちやんと話聞こしてね。」

さすがに顔に出しそぎたのか、違つことを考えていたのがバレてしまつたみたいだ。俺は弥富さんの言葉へと耳を傾け、聞く体勢を整える。

「ねえと聞かねえで、今まで聞いてなかつたってことね？」

しまつたああああああああああ！！

「すいません！ 言葉の綴りいやつですーー！ ちゃんと聞いてます

! !

「いいへ、なら良いんだけど」

なんとか無事に乗り切ったみたいだ。何か、怪しむような冷たい
目線がこちらに向いているが、気になったら負けだ。

わね？」

ついに来た……。俺がここに呼ばれた理由。

大事な話なのか、神妙な顔をする弥富さんの真面目な雰囲気に飲まれ、身体が硬くなつたように動かなくなる。さらに緊張のせいか、ゴクリと生唾を飲み込んでしまう。

「……それはね？」

……それは？

「幸司くんに恋愛の手助けをしてほしいの」

一瞬、俺は何を言われたか理解が出来なかつた。弥富朱音さんが？ 誰もが知る有名なあの弥富朱音さんが？？ そんな人に好きな人がいるなんて……。

「嘘おおおオオオオオオオオオオオオオオ！？」

思わず大絶叫。たぶん、部室棟のすべてに届くのではないかと思つほど、悲鳴にも似た驚愕の声が響き渡る。

「ちょっと……五月蠅い！」

俺の声に両手で耳を押さえながら、文句を言つてくれる。

「だつて、学校のアイドルである弥富さんですよ！？ そんな人に好きな男がいるなんて、誰だつて叫びたくなりますよ！！」

「えつ？」

俺の言葉を聞いて、理解ができないかのよつな不思議な表情で、首をコテンと傾げる。しかし、だんだんと俺が言つた言葉の意味を理解したのか、弥富さんの綺麗な顔が朱色に染まっていく。

「ちつ、違うつて！ 私の恋愛じゃなくて、他の生徒の恋愛を手伝つてほしいつてこと！！」

「えつ？」

今度は、俺が首を傾げる番だつた。

「おほんつ、つまりね？ 自分で言うのもなんだけど、私つて顔も良いし、スタイルも良い。ついでに性格も良くて、男女関係なく好かれる立場なのよ」

普通なら「何を言つてるんだこの女」と思つかもしないが、弥

富さんだったら納得してしまったのが驚きだ。他の女子がこんなこと言つたら、鼻で笑つてしまふだらう。

言つたら、鼻で笑つてしまつだらう。

「でね、よく女の子が私のところに恋愛相談に来る訳。好きな人がいるんですけど、どうしたらいいですか？」って相談ぐらいなら構わないのだけど、一番困るのが告白できるように手伝ってくれたいって頼み事なのよ」

女子の間ではそんなことがあるのか……。まあ、告白の手伝いつてのは珍しいかも知れないが、弥富さんほど人望があれば、ないこともないのだろう。

ん?
でもそれが、おれと何の関係があるんだ?

な話ですか……」「え？」

たちの手助けをしてほしいんだけど」

え？、「この先輩ったら何言つちやつてくれてんの？」まだ女の子
と付き合つたこともない俺がそんなことできる訳ないじゃないです
か。

「そもそも何で俺なんですか？」弥富さんほどの人なら、他に頼むことができる人なんていくらでもいますよね？「何か俺じゃないといけないような理由があるんですか？」

「はつ？？」

ちょっと待て、落ち着こうか俺。弥富さんは何を言つたんだ。
由がない？ いやつ、そんなことはないはず……。

「何で！？ 何か理由がなきや会つた事も話した事もない俺なんかに頼むことじやないでしょうが！」

興奮のあまり、早口で息継ぎもしないまま言い切った。

「本当に理由なんてないのよ。 といって言えば、朝歩きながら悩んで

た時に、たまたま幸司くんが目に入ったからかな。私だけ他人のことで悩むのもアレだつたから、あの人も巻き込んでやおう! みたい?」

「そんな適當な……ってか、アレって言われても分からないんですけど」

「ん~と、面倒とかムカつくって意味?」

「人から相談受けといて、面倒とか言わないでくださいよ」

「あつ、言い忘れてたけど、断つたら私をエッチな目で見てたこと、学校中に言いふらすからね。元々、この部屋に幸司くんが来たら言いふらすかどうかは考えるって言つただけだし、断られたら私が困るから……別にいいよね?」

すでに、目の前に座る人に対して溜め息しか出てこない。周りの噂を聞く限りでは、みんなに人気のある女性や尊敬する先輩という話だつた。最初はその見てくれから俺も勘違ひしていたが、面と向かつて話したら分かる。

この人 すぐ適當で、面倒で、自分勝手な人だ!!!

正直、詐欺さきにでもあつた氣分である。だが、まだ俺は救われた方だろう。あくまでクラスメイトの話を盗み聞きしただけで、最初からあまり彼女のことを知らなかつたのだから。

この性格が学校で噂になつていなければ、おそらく意図的に周りに隠しているからだろう。これほど適當な性格の人なら、生徒や先生から信頼などされるはずがないし、尊敬もされないように決まつている。

結局、俺はえらい貧乏クジを引かされただけみたいだ。

弥富朱音やとみあかねの本当の性格を知れて嬉しい?

学校一のアイドルと呼ばれるほどの美女とお話ができるて楽しい?

アホか。

こんな逃げられもしない、面倒なことを押し付けられてそんな気持ちになる訳ないだろうが。

ここはやつぱり、いつものセツツを書いておかなければならぬだろ。

「あ……鬱だ」

そう呟いた瞬間、部屋の扉がガチャリと開いた。

やつぱり逃げられないんですかね？

「失礼します！」

明るい声で扉を開け放った女子を見て、俺は驚きを隠せなかつた。さり気なくクルクルとウェーブした、目立つ茶色の髪。高校生のくせにお前どれだけ気合入れてんの？ と、思わずを得ない化粧つけ。

俺の大嫌いな人と言つても過言ではない女。その頂点に君臨する香澄恋歌の姿がそこにはあつた。

アチラさんも最初の元気な挨拶とは打つて変わり、俺を見てから目を大きく開いて驚いている。

「どう、どうして上木かみきがこんなとこにいんのよ！？」

それは俺のセリフだつちゅーの！ つてか、さつきまで目の前に座る弥富さんに相当心を折られてるんだ、これ以上俺にダメージを与えないでくれ！！

「……すまん」

とりあえず、無難に謝罪してみる。

「はあ？ なつ、何、謝つてんの？ アタシは、上木がどうしてここにいるのかつて聞いてんだけど」

そんなもん俺にも分かんねえよ……。むしろ、ここに居たくて居るんじゃねえっての。そもそもお前がここに来るつて分かつてたら、弥富さんに言われても無視してたわい！！

「 そ、そういうばコイツは俺のことキモ男おつて呼ばないんだな。クラスの女子たちはみんな俺のことキモ男おつて蔑称べつじょうで呼んでるのに。てつくりコイツも他の女子共と同じで、俺のことをキモ男つて呼んでるのかと思つてたわ。

「まあまあ、幸司くんも香澄さんに関係があるから、私がここに呼びつけたのよ。まずは席に着いて、落ち着いて話をしましょ？」

弥富さんに言われたからか、それまで射抜くような目を俺に視線

を向けていたが、渋々と空いている椅子を引いて腰を下ろした。それ以降、チラチラと俺を睨みつけてはくるが、特に何も文句は言つてはこなかつた。

「さて、香澄さん。先日私に相談した通り、あなたには好きな人がいて、その告白を手伝つてほしいつて話で良かつたよね？」

「ちょ、ちょっと、弥富先輩！？　ここに上木がいるのに、何でバラしてるんですか！？」

それにしても、弥富さんと香澄の間で温度差あるなあ。まあ、秘密を暴露されてるから香澄が一人で興奮するにも分かるんだが。

「それにはちゃんとした理由があるから大丈夫」

「全然大丈夫じゃないですよ！　どう考へても上木が関係してくるなんて考へられません！　同じクラスだから分かるんですけど、上木が“優輝くん”と知り合いなんてありえないし……あつへえ～、お前、“優輝くん”ってヤツが好きなのか。香澄が口を滑らしたとはい、良いネタをゲットしたな。俺がクラスでこの噂流したら、コイツも困るだろうぜ、クックック……。

ふつ……。しかし、口を滑らした相手が俺で良かつたな。俺は人の心の痛みが分かる男だから、さすがに他人が嫌だと思つことはしねえよ。こんなに人としてできる俺を褒めてやりたいぜ。

……まあ、その前に噂を流せるような友達がないから、意味がねえんだが。

別に悪いことする訳じやないのに、なんだろう？　胸に込み上げるようなこの悲しさは。

「ううう～。ちょっと上木！　今のは聞かなかつたことにしなさい！」

「わっ、分かった

うおお、怖いよこの人。嫌いな女だが、顔だけはいいからな。睨まれた時なんて、少しチビリそつだつたぜ……。

その前に香澄、自分の失態の相手に黙つててもらつてのに、命令口調つてどうなの？　お前も俺のこと嫌いなんだろうが、誰かに

お願いする時から誠意をもってしかるべきだ。

……ん？ もしかして、俺なんて存在にそんな誠意なんてもんは

持ち合わせていなければ、何事かあるまい？

「最終的には、幸司くんには香澄さんの恋愛を手伝つてもいいんだ
それ」「握り」にからむ俺の心がもたら

から、レジバレーでもいいと懇うんだけどね？ むしり、早くて助かるつ

「えつ？」

「え？」

卷之三

あつ、
被つちやつた。
かぶ

何言つてんの、この人！俺が香澄の恋愛を助ける！？
に心の広い俺でも、それは無理だつて！－
さすが

「幸司くんまで何で驚いてるの？」 せつあ

つい書いたじやん。さすがにもひ忘れたとか言わないよね?」

「それは聞きましたが、俺はまだやるなんて返事してないですよ！」

「別に断つてもいいのよ～？ そしたら、キミの学校での立場がどうなるか分からぬけどねえ～。ついでに、香澄さんの好きな人の名前も聞いたから、クラスでの評判も墜ちちゃうかも」

本当に学校中を巻き込んで、俺を嫌われ者にしようとしてやがる！　クラスではすでに嫌われてるので、今さらですかね！！
断る気力すら奪われ、ガツクリと肩を落とす。すでに心は諦めモードだ。

もうこの人には逆らえない、と。

「ふつふ～ん。その様子じゃあ〇〇してくれたみたいだね。うん、良かつた良かつた」

別に了解した訳じやないですけどね。ただ、あなたのせいで逃げ切れなくなつただけですから。

すると、うな垂れている俺の隣から、バンッと机を叩く大きな音が聞こえた。

「アタシはまだ納得してないです！ どうして上木を手伝わせるのか理由を教えてください……！」

「そうか！ まだ香澄という希望が残つてたんだ！」

少しだけ萎れていた気力が回復する。

結局のところ、コイツが了承しなければ俺も恋愛の手伝いをする必要がなくなつてくるじやないか。

頑張れ、香澄！！ 今だけは、お前を応援してやる。

しかし、そんな縋るような淡い期待は、すぐに田の前の先輩に砕かれた。

「香澄さん、よく考えてみてね」

急に引き締まるような雰囲気に、香澄は氣おされたようにして、たじろぐ。

「私は一年生なのよ？ 最初は、先輩として恋愛相談を受けてアドバイスなんかもしたけど、告白となると話が変わつてくるわ。あなたの好きな優輝くんと面識なんてないし、そもそもの話、優輝くんつて一年生でしょ？ 告白を手伝うつてことは、絶対にどこかで私が優輝くんと関わらないといけないし、その人と直接話さないにしても、どこかで噂が立つのは目に見えるわ。そうなると、あの弥富朱音^{とみあかね}は、優輝という男性に氣があるつて噂になつて、逆にあなたが告白し辛くなつちゃうのよ」

クッ……さすがは今まで適当な性格を隠し続けてきた猛者。こと噂に関しては、弥富さんの右に出る者などいないのではないか。さすがに先読みし過ぎな氣もするが、彼女の口ぶりからすると、それ

が事実なのかとすら思つてしまつ。

隣に座つてゐる香澄を覗き見ると、彼女もまた、何とも言えない表情で唇を強く結んでいた。しかし、今だ納得していゝよつた顔ではない。

「弥富先輩が直接手伝えないことは分かりましたが、何でこの男に手を貸してもらわなければならぬのか分かりません」「最初とは違ひ、霸気が少なくなつてゐるようを感じる。」

そら、そうだろ。クラスでは可愛いと人気がある香澄であつても、学校中の誰もが認める弥富朱音にして、女として『私には勝てない』と言われたようなもんだからな。それを香澄も心で認めてしまつたのが、また辛いんだろうな。香澄つてプライドがすげー高そうだし。はあああ~、この女のことが嫌いなはずなのに、心境だけは何故か理解できちまつ。これはアレか? 嫌いな分だけ香澄を意識しているから、逆にコイツのことが分かるようになつちまつたつてヤツだ。
……皮肉なもんだぜ。

「香澄さんが、上木幸司という男性をどう捉えているかは知らないけど、これだけ付き合いが短い私でも彼が良い人なのは分かるよ? たまに口が悪い時があるけど……」

その言葉は香澄だけでなく、俺までもフリーザせるには充分だつた。

「まあ、嫌いな人のことを教えても理解なんてできないから、この理由は置いておくとして、私が幸司くんを推薦する。それだけじゃ納得できないかな? これでも今まで相談を受けてきた身なんだから、香澄さんには成功してもらいたいって思つてるのよ」

それを聞いて、香澄はシュン^ほン^ほと肩を落とし顔を伏せる。
納得がいかなかつたか? と俺も含め、弥富さんまで黙つて香澄を見つめている。

すると突然、思い切り顔を上げ、決意を胸にしたように叫^ほえた。

「わかりました!! ここは弥富先輩を信じて、この男に手伝つてもらおうと思います!!」

うそくん……。

目前にはしたり顔でうんうんと頷いてる人がいるし、隣では何か
スポーツ漫画のよう熱く燃えている人もいる。

何か、俺だけ置いてきぼりを食らっている感が否めないんだが。
まあそれでも結局、香澄が納得してしまったことで、俺が手伝わ
ないといけないのは変わらないみたいだが……。

やはり毎度お馴染みのセリフを言わなくちゃ耐えられそうにない。

「ああ……鬱だ」

この日から、俺の高校生活は激変したと言つても良かつた。

あの男で間違いないですか？

香澄の告白に協力すると決まった次の日。

午前の授業が終わった昼休み、生徒たちは教室で弁当を食べたり、仲の良い友人らで集まって遊んだりしている。

そんな日常的な光景が繰り広げられている中、俺と香澄の二人は人気のない廊下の端にあるスペースへと身を寄せていた。そして、そこの壁から優輝くんがいるであろうクラスを覗き込んでいた。

「はあああー、なんで俺がこんなことを……」

「はあ？ 何言つてんのアンタ？ 私だつてアンタに頼りたくないつての」

どうして俺は、こんなに口が悪くて、大嫌いな女の手伝いなんかしなくちゃならないんだ。これも全部、朱音先輩のせいだ。ほほ齧迫に近かつたとはいえ、やっぱり早また気がしてならない。

それに、先輩の名前の呼び方についてもそうだっ！

あの時の帰り際、先輩から「これからは幸司くんにも協力してもらうし、『弥富さん』なんて他人行儀な呼び方じゃなくて、『朱音』って呼んでも良いのよ？」なんてことを言われた。普通、女の子の名前を呼んで良いと言われたら狂喜乱舞するのだが、流石に先輩だし、学校一の美女ということもあり、朱音先輩と呼ぶことで双方納得した。あの人、絶対に自分のことを名前で呼びづらいことを気づいてて言ってくるもんだから、余計にたちが悪いんだよ。最後なんて「幸司くん、私を名前で呼んでくれないの？」なんて目をウルウルさせてくるんだもん。

んなことされたら、断れる訳ねえつーのー！。

隣に座つてた香澄なんて、信頼している人を泣かせたつて言つて

激怒しやがるし。

誰だよ……女が三人集まつて姦しいなんて言つたヤツ。二人でも充分姦しいっての。

そんなことを思い出していた時、注視していた教室が開かれ、一人でも人の男が出てきた。

「あつ、優輝くん」

険悪な表情から打つて変わり、ポワーンとした目で先を見つめる香澄。

「ん？ アイツが香澄のお旦当ての男なのか？」

再び廊下の角から除き見ると、俺の目線の先にはバツとしない眼鏡を掛けた男がいた。今は後ろから付いてきた友人らしきヤツラと、仲良くおしゃべりをしている。まったく目立たない風貌で、高校指定の制服もキツチリと着こなすような真面目そうな男だ。

「ちょっと、優輝くんのことアイツ呼ばわりしないでくれる？」

「知り合いでもないくせに、馴れ馴れしく呼びすぎなのよ！」

「イテツ！ なんで頭まで叩きやがるんだよこの女！ アイツって呼んだくらいで殴られなきゃならねえなんて面倒くさすぎるぞ！！ クソッ、文句でも言つてやりたいが、コイツの女子への影響力ってハンパないからな。下手すると、明日から俺のクラスでの居場所がなくなっちゃうー！」

……あつ、もうなくなつてるか。

けど、謝らなかつたらもつと酷い扱い受けそうだしなあ……はある、憂鬱だ。

「……悪かったよ。それでどうするんだ？ 得意じゃないけど、俺が話しかけてここに連れてこればいいのか？」

「アンタ、バカじやないの！？ ここに連れてきたら結局私と話すことになるじやない。それが恥ずかしいから、上木の力なんて借りてるつてのに……まつたく」

そりやー悪うござんしたね。つてか、今までずっとと思ってたが、お前つてこんなに恋愛に奥手だったのか？ 見た目だけだったら、

好きな男にガツガツ詰め寄りそうに見えるんだが。

「ちょっと、私の話ちゃんと聞いてんの？ 弥富先輩がアンタを信用するつて言うから少しは期待してたのに。これじゃあ、最初から不安を覚えてくるわ」

「……俺に何の期待をしてんだよ。そもそもお前のせいで俺はクラスで嫌われるんだからな？ 正直に言ひ切らうけど、俺はお前のことが嫌いだからやる気なんてでない」

「当然だろ？ さすがに暴力とかイジメはなかつたが、クラスで孤立する原因を作つたのはこの女なんだからな。

むしろ、そんな俺に期待してるなんて吐かしやがるんだから、その図々しさにだけは尊敬の念すら覚えるわ！」

「グッ……それは悪かつたと思つてるし、謝るわよ。アタシだつて、あの会話だけでアンタがこんだけ嫌われるなんて思つてなかつたんだから……」

「今まで寂しく空白だつた高校生活を、謝罪の一言で許すと思つてんのか？ 今の俺が掲げる座右の銘がどうなつてるか教えてやるよ。その名も『孤独なロソリー・ウルフ』だ」

確かにハブられたのが入学してからすぐだつたから、今までだいたい一ヶ月間ぐらいか？ その間、寂しさと哀愁を漂わせた背中をクラスで晒してきたんだ。

今まで散々ハブられてきた恨みを『『めんなさい』』の一言で片付けられたら溜まつたもんじやねえつーの。

「あつ……コイツ『『めんなさい』』なんて殊勝な言葉言つてねえわ。『そつ、それじゃあ、優輝くんとの恋が実つたら、アンタがクラスでキモ男^おつて呼ばれないように良い噂流してあげるつて」

あつ、それはちょっと、いや、かなり嬉しいかも。コイツの影響力は俺の身をもつて証明済みだしな。かなり期待が持てそうだし、自分一人で頑張る必要もなくなつて頼りにもなりそうだ。
と、難しい顔をしながら告白を手伝つてやろうつかと考え込んでいた時、香澄は何を勘違いしたのか不満な顔して、

「むうう～、アンタも男でしょ？ 私みたいに可愛い女の子が謝つたんだから、男らしく許すのは当然なんじゃないの？」

えつ、何言ってんのコイツ。一瞬だけ手伝つてやろうかなあ～なんて考えた自分がバカみたいだ。自分勝手すぎるにもほどがあるだろ。これがゆとり社会に毒された子供世代か……別に同情する気なんてさらさらないが、少しだけ哀れに思えてくるよ。

それよりも、自分が可愛いとか思つてるなら勇氣だして優輝くんとやらに告白しろよ。

「……もう面倒だから、それについては何も言わねえよ。お前と悶着したって後が怖そудからな。それで、ここから覗き見てどうすんだ？ 結局アイツと話をする機会がなかつたら先に進まないと思うぞ？」

「それをアンタがどうにかするのよ。まずは優輝くんに好きな女子がいるのか聞いてきてくんない？ 後は好きな女の子のタイプとか、女の子のどんな仕草が好きかとか、女の子にどんなことされたいかとか、つて最後のは……キヤツ！」

両手を頬に当て、赤面しながらイヤンイヤンと顔を横に振つている。

オイ……聞いてないぞ、そんなこと。話したこともない男にいきなりそんなこと聞いたら、ドン引きレベルがマッハなんだが。そもそも残りの三つは、彼女がいない場合にしか聞けないだろうが。つてかコイツ、俺が初対面のヤツに自分から話しかけることが苦手つて知らないんだよな。むちゃ振りもいいところなんだが……つて！？

「なあ、香澄？」

頭の中でお花畠を思い浮かべて『いる』であらう人に向かつて問いかける。

「……なによ？」

すると、妄想の世界から帰還した香澄が、邪魔されて不機嫌な声を上げた。

しかし、ここは言わなければならないだろう。なぜなら、「俺らが無駄に駄弁つてゐる間に、お目当ての人人がいなくなつたんだが」

「……………ハアア！？」

慌てたように、先ほどまで優輝がいたであろう場所を覗き見る。やはり俺が言ったように、そこに優輝の姿はなかつたのだろう。ワナワナと肩を震わせている。

「アンタ、何やつてんのよ！ 上木のせいだ、優輝くんどうか行つちやつたじやない！」

ガバッと勢いよく振り返り、怒鳴る。

「知るかよ！ つてか、俺のせいって何だよ！ お前がさつひと話しかけに行かないからこいつなつたんだろうが……」

「うつ、うるさい、うるさい、うるさい…… ハブられてるくせに、ハブられてるくせに……」

「今、俺ハブられてるの関係ないからね！？」

「初っ端から躡つまづいちやつたじやないの！ どうしてくれんのよ！？」

「初っ端つて……まだお前はスタートラインにすら立つてないだろうが！ 蹤いたつて、話しかけることに成功してから言えや！」

「「ぬううううう！」」「

お互に責任を押し付けあつていたその時、

キーン、コーン、カーン、コーン。

つと、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

よくよく角から周りを見回してみれば、あまり廊下に人がいないことが分かる。おそらく、次の授業の準備のためにそれぞれの教室に戻つてしまつたのだろう。もしかしたら、優輝くんとやらもその例に漏れず、教室に戻つたのかもしれない。

二人はチャイムの音を聞いて、落ち着きを取り戻した。

「……………あー。とりあえずアンタ、今日の放課になつたら部室に

顔出しなさいよ？」のままじやあ先に進みそつもないから、これから

の作戦を練らなくちゃ」

「……作戦って。告白ってそんなに大層なもの必要だつたつけ？

「……分かったよ。それじゃあ、今はもう教室に戻つていいよな？」

「勝手に戻りなさいよ、フンッ！」

そうして。俺は一人、自分の教室へと足を向いた。

別に悪いことしてる訳じゃないが、俺が香澄と一緒にいたなんてことをクラスの連中に知られたら、速攻噂になるだろうぜ。たぶん、そんなこと香澄は望んでないだろうし、俺もアイツと仲がいいなんて思われたくない。

俺はいつものように、トボトボとした足取りで歩いていく。

あの男で間違いないですか？（後書き）

「」もで読んでいただきありがとうございます。
誤字・脱字や、おかしな表現があれば教えていただければ幸いです。

そんなにイジりなこやくれますか？（前書き）

途中で力尽き、中途半端で終わってしまった……もしかしたら、変な文章になつてしまふことがあるかもしません。

あれば指摘していただけると嬉しいです。

そんなにイジらないでくれますか？

その日の放課後。

俺は香澄と朱音先輩がいるであつた部室へと向かっている。もちろん、今も同じクラスである香澄と肩を並べて歩くなんて愚行はしていない。香澄はホームルームが終つたら、足早に教室を出て行つてしまつた。去り際に俺を睨んだように一瞥いちらべつしてきたが、たぶん……絶対に来いよ的な視線だったと思う。うんつ、間違いないな。理由もなく、ただ睨まれただけだったら、正直勘弁してほしい。

「この県立鷲峰高校は、他の県立高校と違つた特色がある。その特色とは、部活もしくは同好会専用の部室棟が敷地内に存在することである。鷲峰高校の校訓として、“文武両道”といつ言葉がある。たぶん、全国どの高校の校訓を見てもありそうな謳うたい文句であるが、鷲峰高校は違つ。

本当の意味で、“文武両道”といつ言葉をそのまま体言しているのだ。

普通の高校の生徒手帳を見渡せば、顧問や部員が五人以上という規約があるだろ？しかし、この鷲峰高校において、そのような規約はない。

さすがに部活に力テゴライズされるには顧問が必須のようだが、同好会はそのかぎりではないのだ。人数制限もなく一人でも設立が可能で、しかもあり余つている部室まで貸与あしょされという高待遇ぶり。月に一度の定例報告会への参加と、活動報告の提出さえ満たせば、結構簡単に受理されるらしい。

お陰で、有名な運動系の部活からマイナーな文科系の同好会まで、この高校にはたくさん存在している。

その中で、朱音先輩も何かしらの申請を行い、同好会を設立した

のだろう。他に部員がいるのかは分からぬが、教師にも信頼されている朱音先輩ならば、同好会申請が通るのも簡単だつたろう。

もちろん、高校側から部活を推奨されているというだけで、強制的に入部しろと言わわれていい訳ではない。

なので、当然ながら俺みたいにどこにも所属していない生徒なんかもいる訳で……。

再び訪れた『CLUB ROOM 110』と書かれた部室。

このドアの向こうには、すでに厄介な先輩と嫌いなクラスメイトが顔を合わせているだろう。そう考えるだけで、部屋に入りたくないという衝動に駆られるが、約束は約束だ。俺は折れかかる心を何か奮い立たせて扉を開け放つ。

「ちょっと、遅いんだけど。女の子を待たせるなんてどういう神経してんの？」

……マズイ。もう心が折れちゃいそうなんだが。

「ちょっと友達に用があつたんでな、少し遅れたわ」

「ハア？ アンタに友達がいないことぐらい、アタシに分からないとでも思つたの？ 言い訳するならもひとつマシなのにしてよ。つていうか、遅れたことに言い訳するなんて、もう最悪」

自分でも無理があるとは思うけど、咄嗟に口から出ちやつたんだから仕方ないじゃん！？

お前に言われなくても、寂しい現実はしつかり受け止めてるつての！

「わっ、悪かった。つい強がっちゃいました、ハイ」

「フンッ。今回は特別に許してあげるけど、今後そんな分かりやすい嘘が私に通じるなんて思わないことね

「じょっ、承知しました」

俺と香澄の間で微妙な雰囲気が流れた。すると、今まで大人しく椅子に座っていた朱音先輩が口を挟む。

「幸司くんって友達いないんだ？ 最初は暗そうな人に見えたけど、話してみると意外に面白い子なんだけどね」

そのセリフに香澄が信じられないといった顔で抗議する。

「何言つてるんですか、弥富先輩！ ノイツつてば、教室で一人寂しくゲームなんかやつてるから、みんなにキモヲタつて呼ばれて敬遠されてるんですよ！？ まつ、まあ、誰かのせいでここまで酷い扱いを受けることになつたのは間違いないんですけど……」

「オイ……しゃべるのが苦手だからつて一人でゲームしてたのは俺の落ち度だと思うが、ダサいから嫌われてるつてさすがに言いすぎじゃね？」 言いよどんでるが、俺がキモヲタつていうレッテルを貼られる切つ掛けを最初に作つたのは香澄、お前だからね？

「ふうん。幸司くんって今流行りのヲタクくんなの？」

「いいえ、違います。アニメやゲームが好きな、どこにでもいる健全な高校生です。」

そう弁明しようと口を開けかけたが、

「クラスの全員に認知されているくらいです」

香澄よ、何故お前が答えるし。

「別に私はキモイつて思わないけどなあ）。それにゲームが好きつていうのも一つの個性じゃない？」

朱音先輩よ……あなたは女神か何かですか？ 高校に入学してから、初めて俺の趣味を認めてくれたぞ。いやあ、さすがは学校一の人気のある女性。香澄なんかとは比べ物にならないくらいの心の広さだぜ。

香澄なんて自分の意見に賛同してもらえると思つてたみたいで、朱音先輩に否定されて悔しそうな顔してるし。

ハツハツハー、さまあみろ！

「でも、世間体的には嫌われると思うけどね」

朱音先輩いいいいいいいい！！

一瞬でも朱音先輩のことを良い人なんて思い、浮かれてしまった自分を殴りたい。結局は持ち上げて落とされただけだった。

隣では、「やっぱりそつよね、うんうん」、なんて頷いてるヤツもいるし。

「それでも幸司くんって、そんな世間体を紙くずのように無視してゲームをやり続けるんだから凄いよね。これが男の子ってヤツかな？」自分の進む道は自分で決める的な

……それは俺のことを褒めてんですか？

それ、捉えようによつては、ただの世間体といふ名の常識が分かっていないバカって言つてると同義ですよ？……あまり預定できないのが心苦しいですけど。

香澄が可哀想な目で俺を見てくる。その目は何度も向けられたことがあるが、いつまで経つても慣れないからやめてくれ。

「つと、こんな無駄話している暇なかつたね。せつ、幸司くんもそんなところに突っ立つてないで、早く椅子に座つて

「…………ふあい」

ヤバイ……学校にいるつてだけでもテンション下がるのと、部室に来ただけで、なけなしの気力まで奪われてしまった。

力尽きたよつて、ドカッと勧められた椅子に腰を落とす。

「よし、それじゃあ話を始めるわね？」

香澄は「ハ」イ」と元氣良く返事し、俺は壊れたカラクリ人形のように首を力ク力クと縦に振る。

「幸司くんが来る前に、香澄さんから今日の昼休みの出来事を聞いたわ。そこで幸司くんは優輝くんつて子を見て、どんなこと思った？」

「どんなつて……あんまりパッとしたしない真面目そうな男つて印象ですかね。香澄が好きだつて言つもんだから、もつと今ビキなかつっこいい男を想像してましたよ？」

すると、また香澄が眦を吊り上げる。

「ちよつと上木のくせに『香澄さん』……えつ？」

「また言い合いを始めると話が全然進まないから、今は大人しくしてね？」

「はつ、はい……」

さすがに朱音先輩も、一々話しが途切れるのが嫌だつたみたいだ。顔は笑顔だが、何故か文句を言わせないような迫力を感じる。

そして俺のほうへと向き直り、先ほどとは打つて変わったかのような神妙な顔をしたかと思うと、テーブルの上で手を組む。

それ……ゲンドウさんポーズですか？

そこは弥富朱音だからと言うべきか。なまじ美人であるが故に、ゲンドウさんポーズにやたらと淒みがある。たぶん他のヤツがやつても、これほど氣おされるような雰囲気が出ることもないんじゃないだろうか。

なんかこの雰囲気に呑まれすぎて、姿勢を正して生睡まで飲んでしまったんだが。

そしてその体勢のまま、朱音先輩は嚴かに語りだした。

「それでね幸司くん、ここからが本題。キミが今、優輝くんに対し抱いた感想が、そのまま弥富さんが告白に困つてゐ、一番のネックになつてることなの」

ええっと、どうこういつづですか??

何か色々ありますですね？（前書き）

まあまあまあ！！

何か文章に納得がいかないです（泣）

何日か空けると、流れがつかみにくくなってしまつ……

後、感想で香澄嬢のキャラや上木に対する呼び方などがキツイという意見が多くたため、今まで投稿した各話を少しだけ改訂しました。

全体の進行と設定 자체は変わっていませんが、今まで作品を読んでいただけた方たちには、これから香澄嬢に違和感がでるかもしれません。

本当に申し訳ないですが、良い作品にするために受け入れていただけると嬉しいです。

何か色々ありますですね？

「優輝ってヤツが眞面目でパツとしない男だから告白できない？それってどういうことですか？」

俺は問われてから少し考え込んだ。しかし、いくら考えてもまったく答えが見えてこない。

「やっぱり理解できないって顔ね。詳しく説明すると、香澄さんが『弥富さん…』……何？」

説明しようとした朱音先輩を香澄が止めた。俺も朱音先輩も、訝しむように香澄に視線を向ける。

「さすがに私自身のことなんで、上木には自分で説明します」

そう言いきる香澄の顔には、ある種、決意のようなもの覗える。

「……うん、分かった。今言えるところまで良いから」

朱音先輩も香澄の気持ちを理解したのか、少々躊躇いはあるそうだったが、否定はせずに受け入れた。

「分かっています」

香澄は俺の目をじっと見つめてくる。

もしかしたら、まともに目を合わせたのがこれが初めてなんじゃないだろうか。今まで視線を感じたことはあるが、俺自身まともに相対などしていなかつた。するだけ無駄だと思っていたのだ。しかし、今はヲタクやらキモイやらの感情を抜きに、一人の相手として相談されているのだ。

例え嫌いな相手だったとしても、ここまで誠意を見せられてそれに答えないほど、俺の人間性は腐っていないつもりだ。

もちろん、嫌な女というイメージは変わっていない。

でも、ここまで一生懸命で思い悩んでいる香澄に、少しは応えてやろうかと思つてしまつた。

そして、田を合わせたまま香澄が口を開く。

「アンタの言うとおり、優輝くんはあまり今どきな男の子って訳じやないの……。少し前の私なら、そんなパツとしない男なんて田もくれなかつたけど、あることがあって優輝くんが好きになっちゃつたの」

顔は俯き、いつもの元気な声もない。

「クラスの明るい男とか、女慣れしてるヤツとかだつたら話し慣れてるからどんな話をすればいいのか分かるけど、優輝くんのようない人は今まで話したことがあまりないから……」

「なるほどな。つまり、今まで付き合いのあつた男たちとはまったく違うタイプの男だから、何を話していいのかも分からぬわけだ」
何となくではあるが、この理由は俺でも理解できる。俺もヤンキーとかギャルみたいなヤツと話さなければならぬような状況になつたら、同じことを思うだろ？
仮に同じ年、同じ性別であつたとしても、今まで生活してきた環境が違うのだから、惑うこと仕方ない。たぶん遊ぶ場所から趣味まで、もうもう違つから話が合わないだろうし。

優輝つてヤツと何があつたかは知らないが、ここまで香澄とは違うタイプの人だと、その問題も際立つてくる気がする。

これはあくまで俺の思い込みなのかもしれないが、当たらずも遠からずと言つた予想だと思う。

そして、少しだけ面を上げて弥富先輩を覗き見る。

「それでみんなに人気のある弥富先輩に相談をしたんだけど、先輩も男の人と付き合つたことがないらしいの。告白は何回もされたみたいだけど自分から好きだつて告白したことはないみたいだし、そもそもまだ好きな人が出来たこと無いみたいだし。だから男の子にどうすればいいのかあまり分からぬって……」

それを聞いて弥富先輩は苦笑する。

まあ、自分の恋愛経験の無さを言われたのだから仕方ないのだろう。それほど気にしている様子でもなかつたが……。

しつかし、そんな事情で一人は仲が良かつたんだな。でも以外だ。

あの弥富朱音に恋愛経験がなく、まだ好きな人もいないとは。

「で、アタシどうしたらいの全然分からなくなつて……」

そこまで言い切つたきり、香澄は口を閉ざして再び俯いてしまう。

そして、その後を受け継いだように朱音先輩へとバトンが渡される。

「香澄さんが言つた通り、私には恋愛経験はないけど、彼女があんまりにも一生懸命だつたからね。他の人の相談には適当なにわか知識とか、それらしい」と言つて誤魔化すけど、今回に限つては情に走つちゃつたつて訳。それでこの前の朝、どんなアドバイスしようかつて悩みながら歩いてた時にいたのが、幸司くんのよ」

「ええ、俺は本当にただ運が悪かつただけなんですね。まあ、ここまで心の内を暴露されて手伝わないなんて言いませんけど、もうちょっと恋愛に頼りになる人選をしてもらいたかった……」

「あの、すごく言いにくいくらいですが、俺も恋愛なんてしたことないんですけど……」

「えっ？ そんなの見たら分かるけど？」

「分かつてんのかい！？ しかし、何故だつ！ まだ知り合つて數日しか経つていらない人に見抜けるものなのか！？」

と、納得ができない疑問に駆られる。

「だつて、見た目で結構分かるもんよ？ 顔の良し悪しは別にして、彼女がいるのならもう少し自分自身に氣を使うはずだし。そんな朝起きてからそのまま学校に来ましたつて風貌ふうぼうじゃあ、女の子が好きになつてくれるはずが……」

「普普通通！」

「あの……鼻で笑わぬいでくれますか？ 結構傷つく現実を突きつけられた気分なんで。

「あの、話の続きを……」

「普普通通……えっ、ええ、そうね。ごめんなさい、こんな時に笑つてたら失礼よね……」

「この人、どこまでツボに入つてるの？ そんなに俺の彼女がいな

い発言が面白かったですか？ すいませんね、自分自身に氣を使えてないのに、見た目だけなら普通だと勘違いしていまして。

「……先輩？」

さすがに目の前で自分のことを笑われ続けることは不愉快だったんで、少し怒気を込めて朱音先輩を呼んでみる。
すると、途端にビクッと震えたように、

「「じへ、「じめん」

と、素直に謝罪した。

今はシユンと元氣を無くしたように肩を落とし、頭を伏せている。
さへ、さすがに俺が怒っているとはいっても、こんな反応などされる
と「口チラが困る。

予想以上に雰囲気が悪くなつた部屋。

隣では、未だに思い人のことで思い悩んでいる香澄。普通なら「
何、先輩に生意氣なことしてんのよー」とか怒つてくるはずなのだが、そんな気配は微塵みじんも無い。

誰も声を発することもなく、静まり返つた部屋。さすがに居たためれなさと、罪悪感を感じてしまう。

「すいません先輩。少し大人気なかつたです」

とりあえず、こんな空気にしてしまつたのは自分の所為でもある
気がするので、頭を下げて謝つてみる。

「そつ、そうね。私も悪かつたわ、ごめんなさい」
と、なぜか落ち着かないかのような口調であるが、しっかりと返事を返し許してくれた。

「ちょ、ちょっと雰囲気もおかしくなつちやつたし、幸司くんも香澄さんの現状を聞いてどう優輝くんつて子との仲を取り持つか考えなくちゃダメでしょ？だから今日はこれくらいで解散して、明日また話し合いましょう？」

やはり朱音先輩の様子がおかしい。俺が怒った雰囲気を出した辺りから、微妙にキヨドつている感がある。

それが何故なのかは分からぬが、先輩の言つ通り、ここは一度

解散して自分で考えた方が良さそうだ。

香澄も未だに元気がないし。

はああー、もう告白を手伝つと決めたことはいいが、香澄の問題も含め、先が思いやられるな。

そして、その日は一度解散となり、各自家に帰宅していく。

ああ、お久しぶりですね？（前書き）

自分でも予想外の新キャラ登場。
でも、話を続けるのに必要だつたと言い訳してみる。

ああ、お久しぶりですね？

俺は朱音先輩や香澄と別れ、帰宅の途についていた。

時刻はちょうど五時四十五分を回ったあたりである。

六月中盤に突入し、夏にも近づいているためか、未だに陽は沈みきっていない。

俺はトボトボと歩きながら、今日部室で聞いた内容を整理し、これからどう香澄に協力しようかと思いに耽る。ふけ

先輩や香澄の言をまとめるど、香澄が今まで接したことのない相手へと好意を寄せてしまったことによつて、どうアプローチを掛ければいいのかが分からぬといふことらしい。

確かに大人しそうな優輝と今どきのギャルっぽい香澄ではお互いの認識や価値観までまったく違うのも頷ける。

俺自身も女の子と付き合つた経験もないし、告白したことすらない。もちろん告白されたこともない。

正直、俺の身に余る相談を受けたような気がしてならないが、何か妙案を考え付かない訳でもない。

それを香澄が受け入れ、実行するかは別としてだが……。

俺は明日、香澄に説明をするために、頭の中でどうすれば優輝と関係を持てるのかをモンモンと悩みながら家に帰宅した。

俺の住んでいる家は、鶯峰高校から徒歩三十分の位置にある1DKのアパートだ。

主に生活する部屋は洋風の内装で、キッチンや他のスペースも合わせると全体の広さは11・5畳もある。しかもセパレートタイプという、俺にしてみれば絶対に外せない条件も満たしている。

布団や机などは実家から送つてもらつたため、真新しい感は小さくなつてしまつたが、唯の高校生の俺が一人暮らしをするにしては

充分な生活空間と言えるのではないだろうか。

俺は鍵を開け、玄関に靴を脱ぎ散らかしたまま部屋へと赴き、制服から身軽なジャージへと着替える。流石に室内でこれくらいラフな格好をしても、誰かに咎められることもないだろう。普段の生活に五月蠅い親も今はいねえーし。

グウウウウ……。

あつ……。

チラリと時計を見る。

時間はすでに六時半を回っていた。

……もうこんな時間か。思春期真っ盛……じゃなくて、成長期真っ盛りだからな。こんな時間に腹が減るのも仕方ないだろう。

部室に寄り、考え方をしながら歩いていた所為でいつもより帰宅が遅くなつたみたいだ。いつもなら授業が終わつて速攻帰るから、五時過ぎには家に着いてダラダラしている。高校に入学してから、放課後まで学校に残るなんて今までなかつたし。

アレだよ？ 別に友達がいないから放課後に遊べないとかじやないよ？ ほらつ、俺つて一人暮らしだからさ。早く家に帰つていろいろやらなくちゃいけないことがあるからだよ？

などと、どうでもいいことを考えながら食事の準備を始める。

今日の夕飯のメニューはチャーハンだ。昨日もチャーハン、一昨日の夕飯もチャーハンだった気がするが……まあ、好物だからいいだろう。

最近は男も料理をする時代だとか言つてるが、すべての男が料理をマスターしていると思つてはいけない。一応、簡単な料理くらいは作れるが、そのレパートリーの少なさといったら自分で数えて目を覆いたくなる。だが、その少ないレパートリーの中でチャーハンを作りまくつているせいか、チャーハンだけはやたらと美味しい。他に食べてくれる人がいないため主觀的な意見しか言えないが、

その辺の中華の店で食べるヤツよりも美味しいんじゃないと自負している。

材料も残り物を使って作るという訳ではなく、チャーハンのためにスーパーで買い物をすると言つても間違いではないしな。

オレ流、激ウマチャーハンをたつぱりと堪能した後は、パソコンの前でグダグダとネット小説を読み漁る。

最近はVRMMO系や、神様の手違いですんごいチートな能力を手に入れたぜ、俺TUEEEE!!系を読むことが多い。ああー、こんなに可愛いヒロインたちが現実にいねえかなと、己の理想を脳内で妄想し続けるが、現実はそんなに甘くない。

顔だけ良い女の子なら一人ほど思い浮かぶが、どっちも一癖も二癖もあるものすんごいやツらだ。

本当に現実は優しくないと思い知らされるぜ……。
と、悲しみに暮れていた時、

T R R R R R R , T R R R R R R 。

携帯が鳴り始めた。

その機械音を聞き、俺の身体はビクッと震えてしまう。

コレは別に電話に恐怖しているという訳ではなく、普段ほとんど鳴らない携帯電話に驚いただけだ。

たぶん家族からは掛かつてこないと思うから、下手な勧誘か間違い電話か？と、恐る恐る携帯へと手を伸ばし、画面を見てみる。そこには登録されていない番号が表示されていた。

家族の番号は全員登録されているため、知らない人からの電話の可能性が高い。

電話に出ないという選択肢もあるにはあるのだが……さすがにそれは問題がある気がする。自分の携帯が使えないなり、誰かの携帯

を貸してもらつていいという事態もないこともないしな。

俺は仕方なく通話ボタンを押し、耳に携帯を近づけた。

「……もしもし、上木ですが」

とりあえず無難に名前を言つてみる。

『やあ、幸司。久しぶりだね、元気にしてたかい?』

「うん? その声つて、もしかして薰か? かおる」

聞き覚えのある声だつたが、一応確認してみる。

『なんだい? もう僕のこと忘れてしまったのかい? 幸司がそれほどまで薄情な男だつたとは知らなかつたよ』

どうやら、少々瘤に障つてしまつたようだ。

「わっ、悪い悪い。つで? いきなり電話してきて何か用だつたのか?」

『何か用がなくちゃ電話してはいけない間柄だつたかな? 仮にも僕たちは小学生から中学生まで一緒にクラスだつたじゃないか。言つてしまえば幼馴染と呼んでも間違いではないだろう。幸司は地元から離れた高校に入学して離れ離れになつてしまつたが、僕は未だにキミのことを友人だと思つていたんだけどね』

……何か、さらに怒らせてしまつたみたいだ。鷺峰高校に入学してから嫌なことばかり起きたせいで、少し心が病んでいたらしい。

久々に友人と言われたことに、少しだけ心の汗が流れそうだ。

「……悪かった。少しこつちで色々あつてさ。素直に謝るよ」

『うん? そつちの生活は上手くいくてないのかい? 何かあつたら相談ぐらい乗るよ?』

「いや、それほど問題があるつて訳じやない。そんなに心配してもらわなくても大丈夫だ」

少し強がつてしまつたが、別に虐められているつて訳でもない。

それに、これくらいで相談するとか男としてどうなの? つて感じがするし。

仮じやなくとも俺は男だから、それぐらいのプライドぐらいある

『…………幸司がそう言つなら別に構わないけどね』

何か含みのある言い方だな、オイ。

『まあ、僕もようやく高校生活が落ち着いて久しぶりに話そうと思つただけだから、少しこのまま他愛無い話でもしようか』

「そうだな。最後に話してから一、三ヶ月経つてゐる気がする』

そうして、俺たちは会話を終えた。

最後に、『携帯を新しくしたからこの番号を登録しといてくれ』
と言われたので、電話を切つた瞬間、猛スピードで薰かおるの番号を登録
しておいた。

久しぶりに友人と呼べる薰かおると話せたおかげで、今までの鬱々な気持
ちが少しだけ解消された気がする。それに、明日からまた頑張れる
気力も湧いてきたしな。

明日も学校があるし、部室にも顔を出さねばならないだろう。

一応、香澄が優輝に話しかけられるような案を考えたまではいい
が、香澄がそれを納得するかだけが心配だ。

そんなことを考えながら、俺は一ヶ月ぶりに良い気分のまま眠り
についた。

「」の「」話って要らなくね？　つて、思つてりこのお話。（前書き）

タイトル通り、本筋とはあまり関係ないお話です。

ただ、書きながらどんどん違う方向へと進んでしまったと言い訳してみる。一応書きたいことは決まっていたのに、何故こうなってしまったのだろう。

たぶん次話で少しだけこの話に触れると思うので、まったく関係ないと言う訳ではないのですが……儘ならないものです。

後、少しだけパチンコネタが本文にあります、高校生の主人公でそんなネタは相応しくないと思われるかもしれません。

でもまあ、最近はゲーセンにもあることですし大丈夫かなと……。

過去、私は友人と映画を見る合い間にゲーセンでエヴァ打つてたんですけど、隣にはたぶん小学生かと思われる少年が打つてましたし。（ちなみに私はメダルを出しまくり、映画の時間になつたので台ごとメダルを譲渡しました）

「のーの話つて要らなくね？」って、思ひついこのお話を

明くる日の朝。

清々しい陽気に包まれた快晴。

俺は穏やかな日差しを身体全体に浴びながら、いつもの通学路を歩いていた。

学校まで残り半分といった十字路で、見慣れた女の子が左の角から顔を出す。ただ歩く後姿という何でもない動きであるにも関わらず、何故あの人はこれほど絵になる美しさを醸し出せるのか。

一般ピープルの俺には、到底真似できない雰囲気である。

普通の男ならば、ああ、今日は朝から素晴らしい人に出会えた。朝からツイてるな俺。今日のラッキーアイテムである黄色のハンカチを持っていて良かつた。教えてくれた綺麗な女子アナさんには感謝しなくちゃな。

くらいは思うかもしない。

だが、現実は非情なもので、俺はあの人本性を知っている。まだ出会つて数日と付き合いこそ浅いが、あの人に関わると碌な事にならないのは経験済みだ。

しかも、一番初めの出会いと同じシチュエーションじゃないか、コレ？

ブルルッ。

ああ、何か悪寒を感じるわ。

別に嫌いというほどでもないが、今日の放課後また顔を合わせることになるんだし、朝の通学時間くらいは平和に過ごしたい。

それならば、俺がとる選択肢は一つ。

よし！ 考えすぎかもしけないが、ここは安全を重視して別の通

りから行こう！！

目前を颶爽と歩く麗人は、運よくコソコソ後ろを歩く俺に気づいていないみたいだ。これは好機、いやつ、激アツな状況だろ。

分かりにくければこう言い変えよう。

赤文字、擬似連四回、群予告、デカ枠カットイン、奇数リーチへのランクアップ、最後のオマケで役物始動ぐらいのチャンスな状況だと。

なんかもう99・0パーセントくらいの確立でこのままフェードアウト出来る可能性大だ。

そう思い立つたが吉田、俺は“固有能力：気配遮断”を発動し、壁際に寄り電信柱を盾に隠れ潜む。そして、次の角を曲がろうとしたその瞬間、

「キミ、そんな所で何してるんだい？」

背後からダンディーで渋い声がかかった。

前に気を取られすぎていて後ろにまで気が回っていなかつた、と慌てて背後を振り返る。

そこにいたのは、ピシッとした制服を着込んだ警察の方。双方に目は、怪しいヤツを見つけたとでも言つように訝しく細められていた。

「ふえっ……？」

突然の地方公務員さんの登場に、情けなく呟いてしまう。そして、今の俺の行動を思い返す。

目前の美人さんを見ながら電信柱に隠れ潜むオレ……。これって、客観的に見るとすごく怪しい人なんぢやないかと。

すぐに自分が置かれている状況を理解し、顔の表情が呆然から驚愕へと変化していった。

そして、

「怪しいな。学生のようだが、とりあえず話を聞かせてもらおうか？」

そのセリフに俺は慌てて逃げ出そうとする。

おそらく落ち着いて考えれば、こんな最悪な行動パターンは選択しなかつただろうが、今の俺は慌て過ぎてそこまで頭が回らないほど気が動転していた。

すると、警察官は逃げ出そうとした俺の腕を掴み上げた。そのまま腕を背に回され、身動きが取れなくなる。

「なんで逃げようとするんだ?」

「……ツツッ!」

腕を捻り上げられた痛みにより、苦痛な声が漏れる。

ヤバイ、このまま行つたら警察署まで連行されそうな勢いだ。

どつ、どうにかしてこの場を切り抜けなければ!!

けど、俺がこの場で訳を話しても信用されるか? 最初の印象は最悪。思わず取つた行動とはいえ、逃げ出そうとした時点で犯罪者予備軍に格上げされてそう。

けつ、結構ツンでいる状況じゃないかな、コレ?

どうしようか悩んでいた時、

「すみません」

と、背後から声がかかる。

俺を取り押さえようとしている警察官も反応を示し、二人合わせて声がした方へと振り向いた。

そこに毅然とした態度で立つていたのは、先ほどまで気づかれないようにしていた弥富朱音先輩だった。

風に靡く長い黒髪を引き上げながら、俺たちに花の咲くような笑みを浮かべている。

「あの、幸司くんが何かしたんですか?」

朱音先輩は俺に指を向けながら、動きが止まっている警察官に優しい聲音で尋ねた。

取り押さえる力が弱まったため、チラッと俺を取り押さえてる人に視線を向ける。そこには、突然美人さんに話しかけられて少々顔を赤くしている警察官が……。

「あ、気持ちは分からぬもないけど、なに職務中に見惚れてるんですか、アナタは？」

「あの……聞いてます?」

フリーズしている警察官に再度声を掛ける。

「あっ、はい。聞いてますよ。この男が先ほどからアナタを見ながら怪しい動きをしていたので取り押さえていたんです。危ないので離れていてくださいね」

爽やかな笑みを浮かべながら返答する。

なぜか俺の腕を押さえる力が強くなっているみたいだが……。これはアレか？ 綺麗な女性の前で、俺は強い男なんだぞってかつつけたい年頃なのか？ この警察官の人も若そうだしな……たぶん、进るパッション的な何かが止まることを知らないのだろう。

……つて、本当に痛い、イタイ！ そろそろ腕が限界っす！！

声も出せない痛さに、俺の顔は苦渋に満ちてしまう。

「離してもらつても大丈夫ですよ？ 彼は私の知り合いなので」「へっ？ 知り合いでですか？」

若い警察官が間の抜けた声を上げる。

「はい、そうです。同じ学校で、同じ同好会に入つてゐる後輩です」「何か普通に言つてますけど、俺、いつの間に同好会に入つたんですか？」

「そつ、そなんですか。でも知り合いの割りに怪しい行動してたよう見えたんですが……」

「彼つて……元々おかしな所がある人なので」

何言つちゃつてくれてんの？ この先輩。そんな可哀想な人を見る目を俺に向けないでくださいよ、泣きそうになつちゃうじゃないですか。

つてか、そんなんで納得するなら警察官はなんていらないだろうが……。

「あ、そなんですか。それは仕方ないですわ、ハツハツハツ

！」

納得しちゃつたよ、オイ！？ 美人さんだからか！？ 美人さんだから信用してもらえるのか！？

クツ、なんてブサ^面に優しくない世の中なんだ。もう何ていうか、生まれた瞬間から損をしている気分になつてきた。

「あの」納得していただけたのでしたら、腕を離してもらつてもよろしいでしようか？

「ん？ ああ、すまないねキミ。大丈夫だつたかい？」

「……はい、なんとか」

組まれていた腕が、まだ何かと痛む気がしないでもないが、それを言つても後が面倒そだからやめた。

そうして警察官は俺と朱音先輩を見て、

「それでは、事件ではなかつたようなので本官はこれで失礼いたします。キミもこれからはあんな怪しい行動は慎むよう」「ニカツと爽やかに笑い、口から覗く白く並びの良い歯^{ホワイト}が煌く。そして、再びチャリに跨り颯爽と立ち去つていった。

「…………」

俺は黙り込み、その場に立ち尽くした。すると、

「幸司くん、なんで黙つてるのかな？ ここは私に言わなくちゃいけないことがあると思うんだけどなあ～」

と、隣から助けてくれた人が、ニヤつきながら肩をポンポンと叩く。

「…………すいません。ありがとうございます」朱音先輩

「うんうん、よろしい。助けてもらつたら感謝するのは当たり前だよね。それで詳しいことは聞いてなかつたけど、どうしてあんなことになつてたの？」

彼女の疑問も当然だろう。警察官に、朱音先輩を見ながら怪しい行動をしていたと言わただけだし。

直接、「朱音先輩に見つかると厄介なことになりそうでした」なんて言えるはずもなく、口を噤んだままどう言い訳しようかを考え

る。

しかし、朱音先輩は俺の様子を見て勘違いしたのか、「幸司くん。さすがに私が学校で一番綺麗な人だからってストーカーはいけないとと思うよ?」

「それは断じて違います!!」

何勘違いしてんの、この先輩!? むしろその逆だよ! 朱音先輩の後を付いていこうじゃなくて、逆に離れようとしてたんだよ!?

と、言い訳できないのが悲しいところだ。

ここので正直に答えてみる。どうせ朱音先輩のことだから、「私と会うと厄介そุดから別の道から学校に行こうとした? へえ、そうなんだ。私いままですつごく傷ついたし、学校の友達に一年の上木幸司くんつて子に酷いことされたつて言いふらしちゃうかもしぬないなあ~」なんてことになりかねない。

ブルルルルルルルツ。

最悪の結末を予感し、また悪寒を感じてしまう。しかも、最初に先輩を見つけた時よりも嫌な予感がバリバリだ。

妖怪アンテナとかあつたら、髪の毛がビンビンに逆立っているだろう。たぶん一本どころじゃなく一、三本くらいは。

そんな俺の尋常ではない雰囲気を感じ取ったのか、さすがの朱音先輩も頬を少しだけ引きつらせる。

「だつ、大丈夫? なんかすつごい負のオーラを感じるんだけど…」

…

その声にハツと目を覚まし、優しくない現実の世界へと舞い戻る。俺の妄想の世界ですら優しくなかつたが…。

「はつ、はい大丈夫です。少し嫌な未来を想像してただけなんで」

「はつ、ははは…そつ、そうなんだ。もうこれ以上ツツコんで聞かないけど早く学校行かないと遅刻しちゃうからね」

「…ありがとうございます。俺なんかに気を使ってくれまして」

「いいのよ。それじゃあ早く学校に行きましょーうか」
それは勘弁してくださいっ！

部室ならともかく、一緒に登校するだけで学校中の男どもに田の敵にされてしまうので。たぶん全員分合わせたら、フォノン・メザー並の殺傷力を持つていると思つ。

それくらい、噂に敏感な朱音先輩なら分かることじょーうに……つて、

俺を置いて先に進んでいるだつ！？

さつ、さすが朱音先輩だぜ……。それくらい俺に言われるまでもなく、自分でも分かつてますよつてことか。「早く学校に行きましょうか」つてセリフもただ説明が省かれてただけで、詳しくは「私は一人で先に行くから、幸司くんも早く学校に行きなさい」つて意味だったんだな。

自分の考えていた展開になつてははずなのに、何故が負けたような気分だ。

そしてそのまま、俺は学校に向けてトボトボと歩いていく。
背中に哀愁といつ名の悲しみを背負つて……。

のへり書の話題へなりやね？ つて、思ひへりこのお話。（後書き）

たぶん今年最後の更新になるんだわいつかなあ……

後、感想や評価をいただけると嬉しいです。

作者の意欲がグングン上がります！！

あの、あなたが離してられますか？（前書き）

新年、初投稿！！

…………の割に忙しそうな感じで、一瞬短い感じ。（・”・）

うひ、今度の話はもう少し長くなっていますよ。本当にだよ？

あの、そろそろ離してくれますか？

俺は今、大急ぎで部室に向かっている。

授業も終わり、いつものように特に用事もなかつたので真っ直ぐ部室に向かおうと立ち上がつた時、担任の先生から職員室に来るよう言われた。

なぜ呼ばれたのかはまったく分からなかつたが、教師に言われたことを無視する訳にもいかず、席を立ち、さっそく部室に向かおうとしていた香澄に向かつて目線だけで謝罪する。お互い言葉 자체を交わすことはしなかつたが、一回だけ縦に頷いてくれたので了解はしてもらえたのだろう。

これでまた来るのが遅いと怒られることはないと、半ば安心して職員室へと赴いた。（おもむ）

「失礼します」というお約束のセリフを吐き、職員室に入室する。一直線に担任の先生が座るデスクへと進んでいき、デスクの上に乱雑に置かれた書類と格闘している我がクラスを担当している教師へと話しかける。

「先生」

「ん？ ああ、上木か」

と、頭をボリボリ搔きながら、眉間に皺を寄せた苦い顔でコチラを振り向く。口にプラスチックの禁煙パイポを咥えてるから、タバコが吸いたくて吸いたくて堪らないんだろうな。この教師、仕草と態度だけは完璧にオヤジ以外なんでもないんだが。こんな教師でも三十路前の女性だつていうんだから、誰でも驚くつての。

顔の造形とスタイルだけは整つてるから、もう少し外ヅラに気をかければ生徒たちに美人教師と言われ人気が出るだろうに。もう、仕草だけでプラス要素がすべて覆い隠されてしまつてこるような感

じだ。

もつたといないというか、何というか……うんつ、拙いという表現が一番しつくりくるなっ！

「……上木、今失礼なこと考えてなかつたか？」

なんか先生がギロリとした目で俺を睨みつけてくる。眉間に寄つた皺を数えただけでも三重奏してゐるんですが。つてか、マジで怖いよ。なまじ美人なだけに、怒つた顔にものすんごい威圧感がある。

「いつ、いえ、決してそんなこと考えてないですよ？　ただ先生の顔を見ると、何かとお疲れのようだなあ～なんて……」

ガシツ。

……あの、何で肩を思いつきり掴むんですか？　ちょっと痛いんですけど。

「分かつてくれるか、上木。私がどんだけ苦労して、どれだけ気を病んでいるかを」

いえ、正直分かりませんけど……。さっきのはつこ口から出た言い訳みたいなもんなんで。

肩に置かれた先生の手にギリギリと力がはいる。

……あの、だから肩が痛いんですけど。

「最近はなあ～、教師という仕事を勘違いしている親が多いんだよ。子供が喧嘩して学校に処罰を要求してきたり、酷いのじやあ遅刻する子供を家まで迎えに来いなんて、普通に考えたらありえんだろう。学校や教師にもそりや責任の一端くらいはあるかもしけないが、全部が全部、私たちのせいってのはおかしくないか？　私たちの仕事は子供を育てることよりも、導くことに意義があるのでから」

なんか、最後には「私、正論言つたぜ」みたいな雰囲氣出しているんですが、

それってただの愚痴じやないですか！！　だいたい、先生の仰る導くべき子供相手にそんなことぶつちやけないでくださいよー！

……つて、だから肩に力入れすぎなんだって！ 痛いからもう勘弁してください、お願ひします！！

「せつ、せんせい、肩が、そつ、そろそろ限界です」

愚痴を溢してしまつほど苦惱しているのか、顔を伏せながらも俺の肩を掴む手の力が衰えることはない。さすがに我慢できなくなり、絶々（たえだえ）に離すように懇願してみる。

「ん？ ああ、すまなかつたな。少し感情的になつてしまつた」
感情的じやなくて、暴力的に近い感じですけどね！…………後が怖そうだから言えませんけど。

と、ようやく肩から先生の手の圧力から開放された。

……たぶん真つ赤になつてゐるんじやないかな、俺の両肩。朝の警察官との一悶着といい、今の先生との絡みといい、今日つて俺の厄日なんじやないか？

ちやんと今日も朝の占いコーナー見てきたんだけどなあ。まあ、本田のラッキーキーアイテムである“黒いビーチサンダル”なんて学校に履いてこれる訳なかつたんだが……。

お互ひがようやく落ち着いたところで、先生が話し始める。

「それじゃあ本題に入るか。お前をここに呼び出した用件だが……

実はだな、まだお前の保護者から

「

俺はよつやく先生から開放され、職員室を後にした。

はああ、今日は本当に厄日だな。

まさか家の両親の件で呼び出しがかかるとは。あんまり話したくないんだが、今回は理由が理由だから仕方ないし……今度電話でもするか。

と、考え事をしながら未だにヒリヒリと痛む肩を擦つていると、部室の扉の前にたどり着く。

あの、なんそり離してられますか？（後書き）

たぶん、今回の伏線つぽい話が回収されるのは当分先でしょう。
ちょいちょいストーリーにも関連してきてしまうので、ついで出し
とかなくちゃなあ～、と思い立つて挿入しちゃいました。

友達ってなんだらう? (前書き)

ふいー、ようやく投稿です^ ^

友達つてなんだらう?

部屋に入ろうと取っ手に手をかけた時、中から女子の話す声が聞こえてくる。

さすがに失礼だとは思つたが、今まで女子たちに散々陰口をたたかれてきた習性だらう。中でおしゃべりしているのは朱音先輩と香澄だとは思うが、話の内容が少しだけ気になつてしまい、扉に耳を近づけ盗み聞きする。

「でね？ 朝歩いてた時にお巡りさんが見覚えのある男の子を捕まえたのよ」

「へえ～、それで見覚えのある男の子って誰なんですか？」

「香澄さん、あなたも知つてる人よ？」

「えつ？ アタシと弥富先輩が知つてる人つて、まさか……」

「プププッ……そう、その男の子つてのが幸司くんだったのよ！」

「ええええ～？ アイツって警察に逮捕されかかるのかかってたんですか！？」

「そうなのよ～。最後には私が助けてあげたんだけどね」

「アハハハハッ、上木も弥富先輩のおかげで救われましたよね。それよりも警察官に補導されかかるアイツって……さつ、災難すぎつ、クフフフッ」

「おいいいいいいいいい！」

朱音先輩つたら、なに人の不幸の話をネタにしてんの！？ それ、俺の思い出ワースト3に確実に入る予定の黒歴史なんだけどっ！！

しかも香澄まで大爆笑してるし！

……なんか、一気に部室に入りづらくなつた。

けど、盗み聞かせずに入つてたらネタにしている張本人が突然現

れて、変な空気になつてただろうし。最初はちょっとだけ盗み聞きをすることに罪悪感もあつたが、逆に部屋に入る前に、楽しそうな空気をぶち壊してしまった心構えが出来て良かったかもしれません。

それでも結局、一人がいる部室に入りづらさのは変わらないんだけどさ。

今日はもういろいろあつて疲れたし、もう家に帰りたくなつてきた。でも、一応部室に集まるつて約束しちゃつたしなあ。さすがに約束を破るのは気が引けるし、ここは何も聞いていなかつたことを裝つて入るしか……。

こんなこと言つのもなんだが、俺ってなかなかに律儀な男だよな。と、自分を慰めながら取つ手を回してドアを開ける。

「遅れています」

一人は俺が来たことに気づき、会話をやめて目を向けてくる。そして、

「遅かつたじゃん。先生に呼ばれてたみたいだけど、何かあつたの？」

香澄がテーブルに肩肘をつきながら尋ねてくる。

「まあ、何かあつたと言えばあつたけど、俺の家庭のことだから気にしないでくれ」

「ふうん」

と、あまり興味がないように返事をする。

お前から話を振ってきたんだから、もう少しし喰いついてくれてもいいじゃん。家庭の話はあまりしたくないから、今は助かるけども……。

俺はいつもと同じ朱音先輩を前に、香澄を隣にした、定位位置のイスに腰掛けた。

すると今度は朱音先輩から、

「幸司くんが来るのが遅かつたから、今まで弥富さんに朝に起つたキミの大事件について話してたんだよ？」

「そっ、そなんですか？ かなり恥ずかしいんで、あんまりバラ

さないでほしいんですが

ただの陰口だと思っていたのに、まさかの張本人にカミングアウ
トだと！？

予想外の展開に少しだけビックリしてしまつ。

「だつて面白いぢやない。私と同じ高校の制服着いてもストーカーに間違われるなんて、そうそつない話だよ？」

「それでもですよ。あんまり親しくない人のことをバラすのはよくないですよ」

そこで、俺は大きな溜め息をついた。

「えつ？ 私たちって、もう友達じゃなかつたの？」

「「ハア？？」」

なんか香澄まで口をポカンと空けて呆けた顔をしている。俺だつてそうだ。一瞬、朱音先輩が何を言つたのかを脳が理解してくれない。

ええつと？ 僕たちが友達つて、どうこうことでつしゃる。

「なんで一人ともそんな信じられないみたいな顔してるの？」

いやあ、なんと言いますか。いきなり俺たちが友達なんて仰るから驚いているだけですよ。

たぶん香澄も同じ考えなんぢやないかな？ 朱音先輩とだつたら友達になれて嬉しいだろうけど、俺と友達になるなんて……ね。香澄がクラスで俺がキモイヲタクだつて言いふらした訛ぢやないが、クラスメイト全員に嫌われている俺と友達になるのは、さすがに抵抗があると思う。

俺と香澄は未だに無言のままだ。すると、

「（）っていうおバカな失敗とか出来事つて友達同士で話すと凄く楽し
いし、盛り上がるものぢやない？ だから香澄さんも、あんなに幸

「司くんのこと笑つてたと思つんだだけ。普通だつたらやつまで楽し
そつに大笑いできなよ?」

朱音先輩の言葉を聞き、香澄は雷に打たれたよつてビクッと身体
が震え、顔を赤らめて縮こまる。

俺はとこうと……。

特に何も反応を示すことなく、静かに考え込んでいた。

先輩の言つとおり、俺が部室に入つた時、今までクラスの女子共
がするよつな田を香澄は向けてこなかつた。笑い方もクスクスとい
つた馬鹿にしたよつな声音ではなく、本当に面白い話を聞いたとで
もいつよつな、とても明るい声だつた。

今思い返すと、最初に自分の嫌な出来事をネタにされ笑われた割
には、いつもよつな不快感をそれほど感じた訳でもない。
しかし、

それだけで俺たちが友達といつのは早計ではないだらうか……。
確かに先輩の言つことも一理あるのかも知れない。
だが、俺と朱音先輩は出会つてまだ数日。

さらに、香澄に至つては最初の印象が悪すぎた。

最近は、優輝という男に向ける恋心の熱心さに、口イツも少しほ
良いところはあるのかも知れないと思つてはいるが……正直な話、
それだけの気持ちしか持つていらないのが本音である。

なのに、先輩は俺たちのことを見つけていた。

さすがに無理がある極論ではないだらうか……。

チラリと香澄を覗き見るが、彼女も彼女で何を考えているかわか
らないほど、口を結んで黙り込んでいる。

なんか口を改めて集まつた割には、前回と同じ一の舞になつそう
な雰囲気である。

とりあえずこの話は置いておくとして、香澄の告白の作戦を決め
なければ。

「あの、朱音先輩。とつあえずその話は今度するとして、告白の…
作戦？を話し合つのが先だと思いますが」

「そつ、そつ。上木の言つとおり、優輝くんにビリヤツで告白する
かの作戦を話し合いたいです！！」

香澄まで俺の意見に乗つてきた。しかもすこい勢いで……。

朱音先輩もこのあたりが話の潮時だと感じたのだろう。小さく頷
き、了解の意を示した。

「それじゃあ、みんなが考えてきた意見を出し合いましょうか」

友達つてなんだらう?（後書き）

おかげ様で評価が200ポイントに到達しました!!
評価をしていただいた方や、お気に入り登録していただいた方、さらにはここまで読んでいただいた方。
皆様、本当にありがとうございます!!

俺つてば、なにを書つてんだらうな？（前書き）

だんだんと物語が進んでいく。
カメのスピードで……

俺つてば、なにを言つてんだうつな？

ようやく來た、今日の本題。

先ほどは朱音先輩のおかげで変な空気が流れてしまつたが、ここからは気持ちを切り替へなればならないだろつ。

田の前に座る朱音先輩、隣に座つてゐる香澄までもが、神妙な顔つきをしてゐる。

昨日朱音先輩に言われた通り、香澄がどう優輝くんとやらにアプローチを掛ければいいのかは、一応考えてきた。それを受け入れて実行するかは、香澄次第などこりではあるのだが。

特に、俺が出した案を香澄が素直に受け入れのかと問われたら、逆にコチラが素直に首を傾げざるを得ない。最初よりは香澄との距離が近づいた気がしないでもないが、所詮は優輝に告白をするまでの関係になる可能性が高いだろつから。

だつて、未だに俺に対する風当たりが強いもん……台風なんてなまつちよろい強風ではなく、ハリケーンもかくやといつ暴風レベルで。

俺の頭を色々な不安が駆け巡る中、ついに話し合いは開始された。「それじゃあ、幸司くん。貴殿が考えてきた作戦、この場での開帳を許す」

……おい、朱音先輩。何故最初に俺を指名したし。しかもなんかキヤラまで変わつてるし。

「何で俺がトップバッターなんですか？ 最初つていうのは少し気が引けるんですが」

何事においても、トップバッターとオオトリは遠慮したいのが、俺みたいなうだつの上がらない男の常である。

だから先に朱音先輩の意見を聞こいつと算段してみた訳だが……。次に朱音先輩の口から飛び出た言葉に、心底俺の考えの甘さに愕するハメになる。

「だつて……私、何も思い浮かばなかつたんだもん！」

口元に人差し指を当て、可愛らしく片目を瞑るその仕草は、なるほど……天使のソレだ。たぶん文章で書いたら、語尾に『ハートマーク』か『音符マーク』が付けられるに違いない。

……つてか、そんなことどうでもいいし！！　何この人、あんなに人様に色々と案を考えて来いつて言つてた割に、自分は何も思い浮かばなかつただと！？　そんなことは神様が許しても、この俺が断じて許さん！！

……つて怒れたら、こんなに俺は苦労してないんだろうなあ、ハアアアー。

「あつ、あかね先輩？　さすがにそれは最初に相談を受けた立場的に酷いと思うんですけど」

最初の神妙な雰囲気はどこへ消え失せたのやう。俺は米神にタラリと冷汗を垂らしながら、ジト目を向ける。

「ん？　在り来たりなアドバイスなら出来るよ？　まずは手紙からとか、通学中にパンを銜えながら体当たりして話す切っ掛けを作るとかなら」

「どこから仕入れたんだ、その知識！？　しかもネタが一昔すぎるし、現実味がサラサラねえ！」

そつ、そういうえば前に話したときに、基本恋愛相談には“にわか知識”か“それらしい助言”をするつて言つてた気がする！

よくこんな助言だけで納得して帰つたな、恋する乙女たちよ……

俺なら途中から聞き流す自信がある。

これはアレか？　恋は盲目ならぬ、尊敬や敬愛をする相手の言葉は盲目とか、そういうバージョンか？

さつ、さすがは朱音先輩だぜ……俺には理解不能なことを平然とこなしてやがる。

少々　いや、まったく受け入れがたい現状を突きつけられた氣分だが、結局いつかは案を発表しなければならないと無理やり自分が納得させ、一度だけ大きく溜め息をつく。

「わかりましたよ。それじゃあ、自分の考えた案から話します。最初に言つておきますが、俺も恋愛とか告白とかとは無縁の男なので、そんなに真に受けないで聞いてください。ただでさえ

「前置きはいいからちと話しなさいよ」

香澄、てめえ……。最初にハードル下げとかないと、後で「はあ？」アンタ本当にそれで成功すると思つてんの？ これだから女子にモテない男は……」なんて言われたら困るだろうが……。

俺が築ける、唯一の防衛線を張る準備を邪魔しないでくれ。

「……悪い」

まあ、所詮は口に出して言えることではないので、無難に謝つておくしかない。

「ふんっ！」

未だ顔から赤みが抜けきっていないまま、香澄は腕を組んでそっぽを向く。

「まあまあ、幸司くんも悪気があつた訳じゃないと思つから、落着いて聞いてみましょ？」

それ、先輩が言えるよつなセリフじやない」とぐりには自覚してください。

「それじゃあ、改めて俺の考えてきたことを言いますけど、香澄……」

「なによ？」

そっぽを向いたまま、田線だけを口チラに向けてくる。

「お前、言つたよな。優輝ってヤツとキャラも価値観も違つから、話しづらいみたいなど」

「うん、言つたけど」

「なら、話は簡単だ。まず最初に、お前が優輝に見た目を合わせろ別にもつたいぶつた言い方をした訳じやない。ただ淡々と思つたことを言葉に表しただけだ。

それなのに……。

二人とも何故、そんなに呆けた眼で俺を見ているのか……甚だ疑はなは

問だ。

「……上木、アンタ何言つてんの？」

そんな、心底呆れましたみたいな顔しなくてもいいじゃないか。

俺なりの考えがあつて行き着いた妙案なんだから。

「あのねえ～上木。アンタは女の子と付き合つたことがないから分からないかもしないけど、お互いの性格とか価値観つてのは、付き合つ上ですつごく重要なことなのよ？ 見た目の問題じゃなく」

それは付き合つたことがなくとも、何となく分かるぞ。

「あのね、幸司くん。女の子と付き合つたことがないのは分かるんだけど、見た目を変えたくらいですぐに内面なんて変わらないし、結局はお互いの内面、相性になつてくるから、それだけじゃあちよつとね……」

それも何となく分かります。

つてか俺の案、不評もいいところだな。一人とも納得の『な』の字もないみたいだ。

「二人が言つてる」とも理解できますよ。ただ香澄、これは俺の持論なんだが……内面ももちろん大事だと思うが、その内面に興味を持つてもらうのに、外見がとつつき難い様相だつたら自分を知つてもらう機会すらないだろ？ 結局、優輝に話しかけるのは変わらないんだから、今の香澄みたいな今どきのギャル風味じやなくて、優輝に合わせた落ち着いた外見の方が受け入れやすいはずだ。最初の印象つて大事だと思うし、今後の好感度アップにも差が出てくると思う。だから香澄、お前はまずそのギャルみたいな茶髪と爪のマニキュア、制服の着こなしからどうにかしろ。優輝に話かけるのはそれからだし、そのときは

「そのときは　俺が頑張つてビリビリかしてやるよ

そういう切ると、真面目な顔をして香澄の眼を見つめる。
するとどうだろ？

今まで半分だけこちらに向けていた顔が、勢いよく逸られ、身体ごと後ろを向いてしまう。そのまま時間が止まつたかのようにしばらくフリーズしていたのだが、突然ガタツとイスから立ち上がり、カバンを引っ掴んでものすんごい勢いで部屋から出て行つてしまつたのかも、なぜ帰つてしまつたのかも、まったく理解が及ぶ範疇はんとうではない。

もしかしたら、知つたかをするような口ぶりや生意気な意見にムカついて帰つてしまつたのかもしれない。

状況が飲み込めず、朱音先輩に縋るすがような視線を送つてみるが、

「へえ、ほ、ふうん」

と、ニヤニヤしながら、俺を見ている。

何が言いたいんだこの先輩。あからさまに私はすべて理解してますよ？ みたいな視線を返してきやがつて……。

でもまあ、今日はこれで解散つていうのは俺でも理解ができる。もう俺が伝えたいことは伝えたし、帰るとするか。

明日は高校創立記念だなんだか知らんが、鷺峰高校においては休日となつている。

慣れないこともしたし、今日は疲れたから早く帰つて寝よう。

と、朱音先輩に軽く挨拶をしてから部室を後にした。

俺つてば、なにを書いたらいいんだらうな？（後書き）

確認しましたら、評価ポイントが300を超えていましたーー！

これもお気に入り登録や評価をしてくださった方々のおかげです、本当にありがとうございます^_^

これからも頑張って更新していくつもりなので、応援よろしくお願ひします！！

一人でこらへ、余計なことまで考えちゃうよね？（前書き）

今回の話は、何故か下手な評論っぽい文章になってしまっています。

一人でいると、余計なことまで考えちゃうよね？

今日は、高校創立記念日という休日だ。

正直な話、昨日のホームルームで担任の先生に言われるまで、今日が休日だったと気づかなかつたというのが本音である。普通の高校生ならば、降つて湧いたようなこの休日の予定を楽しそうに話し合つたり、集まつて遊ぶ約束なんかしたりするんだろうが……。

悲しいかな、俺にはそんな友達などいない。

しかし最近、学校に友達が一人もいない俺なりに思ったことがある。

それは……。

友達とは　ある種、一つの嗜好品の部類ではないかということがだ……。

今のは“ぼっち生活”に身を浸せば分かる。友達なんかなくとも人というものは生きていけるもんだなと。

別に友達がいるくらいで俺が死ぬ訳でもないし、生活ができるくなる訳でもない。ただ娯楽の幅が広がり、その日を生きる上での充実感が得られる。いたらいたで楽しい日々を遅れるし、いなかつたらいなかつたで、寂しい日々を送ることになるだけ。

だから友達とは、そういう類の嗜好品だ。たぐい

だけど俺は……そんな嗜好品という名の友達を欲してはいるが、それが贅沢だ、などと思うことはない。

人生一度の高校生活において、友達は一つの重要なキーファンクションになり得るだろう。

ざつと簡単に考え付くだけでも、『趣味』、『夢』、『青春』など

ど、多くのキーワードに『友達』という単語が大きく関連してくる。なれば自己の成長と、大人へと駆け上がる一つのファクターという側面もあると思つ……んだけど……。

はああー、俺つて結構病んでるのかな?

何もすることがない一日だからといって、意味の分からない思考の渦に嵌^はまつてしまつた。

こんなことを考えてしまうのも、昨日朱音先輩が俺と香澄のこと

を“友達”なんて言うからなんだろうか……。

あれにはさすがの俺も驚いた。だつて唐突すぎるんだもんな。なんていふか、ボディーブローを喰らうかと思つたら、いきなり向きを変えられて滅殺アッパーを喰らつてしまつた感じだ。予想外に頭をガツンと搖さぶられ、あつけなくダウン……そんな感じ。

ただ、香澄はどうだつたんだろうか……。

アイツも顔を真つ赤にして俯いていたくらいだから、アイツなりに何かを思つところがあつたんだろうが……。

まだ高校に入学して一ヶ月ちよいだし、まともに話したのなんて、この数日の間くらいだ。しかも俺とは性別も違うから、あの時に何を考えていたのかなんてまったく想像もつかない。

……できれば、怒りで顔を真つ赤にしていた、なんてことではな
いとを祈るばかりだ。

ああーダメだ、ダメだ!!

さつきからマイナスの方向に思考が傾きすぎだ。

『悩む』^{ダーカクサイド}という行為は若^{ゆえ}故の特權だとはいえ、わざわざ自分から暗黒面に墜^ハけることはない。

こんなことばっかり考えていると、せつかくの休みを本当に無駄にしてしまう気がする。……仕方ない、ここはネット小説を読み漁

り、厳しい現実から羽ばたくとしようか。やつすねば、少しは気分が紛れるだらうしな。

そうして、俺の休日は終わった。

次の日。

昨日は休みで特にやることもなかつたので、普段よりも早く就寝してしまつた。そのせいか、いつもよりも早く眼が覚めてしまい、準備も滞りなく進んだので早めに家を出た。

この時間ならば、さすがに朱音先輩にも出くわさなこと思いつし、この前の忘れない黒歴史が上塗りされることもないだらうぜ。

高校に着き、門をぐぐる。

視線を周りに向けてみれば、朝練に性を込める若人たちが、忙しく動き回つてゐる。

朝つぱらから「苦労なことだな」と思いながら彼らの横を通り過ぎ、玄関で上履きに履き替えて自分のクラスへと向かう。
さすがに朝が早すぎたのか、校舎の中にはチラホラと教師の姿しか見えない。この調子じやあ教室の中も同じようなもんだらうと、トボトボと歩を進める。

よつやくといつた面持ちで階段を上りきり、三階にある自分のクラスにたどり着いたところで、おもむろにドアを開け放つた。
もちろん、「おはよー」なんて明るく声を掛けることなんてしない。

たぶん、まだ教室には誰もいないだらうし、仮にいたとしても返事を返してくれるなんて思つてないからな……。
ああ、本当に悲しくなるわ。
と、その時は思つていたのだ。
しかし、

「おはよ、上木」

挨拶をされたことに、思わずその場で立ち止まって身構える。

別に身構える必要なんてまったくなかつたのだが、あまりにも驚きすぎての咄嗟の反応と言つたところか。もしくは、この反応もある種、自己防衛とも言うのかもしれない。予想外すぎる展開を受け入れられず、自分の心を守ろうという働きという意味で……。俺はゆっくりと声がした方へと顔を向ける。

最初に目に入ったのは、空いた窓から吹く風にフワフワと靡く、緩くウエーブがかつた長い黒髪。そして、クリツとした可愛らしい大きな瞳が印象的な、清純そうな女の子だった。

一人でこるし、余計なことまで考えちゃうよね？（後書き）

ふいー、今回の話にある『キーファンクション』といつ単語。そんな言葉つて実際にあるのですかね？一応、『友達とは一つの重用な鍵となる機能』って意味で書いてみたんだけども……。『ファンクションキー』ってのは聞いたことがあるけど、意味が違つてくると思うし。つてか、パソコン系の用語だし。

うーん、間違いな表現だつたら、ご指摘いただけると嬉しいです！――

後、この作品、評価が500ポイント突破しました――。そして、昨日はまさかの日間ランギング入り^_^

新しく次話を投稿するたびにポイントが増えていく……なんと嬉しいことか。これからも話を続けていこうという気力が湧いてくるので、感謝感激です！！

ここまで読んでいただけた読者の方々、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5716z/>

恋のキューピッド君

2012年1月12日20時13分発行